
聖歌伝

田中美紗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖歌伝

【Nコード】

N5475R

【作者名】

田中美紗

【あらすじ】

人魔の戦いが各地で起こる世の中、無力な人間を助ける世界傭兵機構・ガーデンの自他共に認める落ちこぼれ娘、生翠は自分の実力で歌術士となり、自分のコネで剣士となり、世界で唯一の歌術剣士として名乗りをあげたが落ちこぼれたる所以、彼女は自分の身の守りを固める守護悪魔を持っていなかった。

それ故、戦場に出られない傭兵として長くお留守番係になっていたが、その歌術の才能と運動神経は使わないのは勿体ないと、凄腕剣士・夜白が派遣される。

彼女の活躍を増やそうと本部は画策するが……………。

悠久の箱庭／ガーデン（前書き）

中学の時に書いたときは男の子のような堅実さを持っていた生翠も惚れっぽくミ－ハーな性格にしてみたら物語の方向がズレるズレる。原文の中学で書いた小説が中飛びで見つかるせいか、テイストはかなり違っています。

でも同じようなのってなかなか書けませんね。

同じように書いてるつもりなのにその日の気分で随分違うし、やっぱり現役で書いてたときの言い回しとか凝ってて、でも今の方が人生経験のお陰で世界は表現できるのかも。

一長一短。一本前に投稿した唯一のモノにも書いたんですが日和ってます。

もう少し偏見持たせた方がこういう話って面白いモノですよね………。

悠久の箱庭／ガーデン

？・悠久の箱庭／ガーデン

おわかれの言葉は未来を祝福するものだったけど、哀しみに満ちていた。

私を包むその腕の持ち主は二人とも止め処なく涙を流していた。

「生き生きと過ごして欲しいから『生』。良い字を貰ったわ」

「『翠』というのも素敵な響きだ。これから君がもつと輝ける名になる」

おかあさま、おとうさま、リディアをあいしてくれてありがとう。
リディアはここからいなくなるけど、歌を唄う時は故郷を思っ
て唄う。

リディアは夢の中で、いつもおかあさまの腕に包まれて、おとう
さまに守られて笑ってる。

そんなリディアはあなたたちの中から消えます。

でも決してつらい所に行く訳ではありません。

リディアはあの中でしたか生きられない籠の鳥なのです。

リディアのことを忘れないでなんてとても言えません。

でも、どうか健やかに…………

世界は人間と悪魔が対立する形で存在する。

近年、悪魔の活動が人間の領域を侵犯するほどになってきていた。
人々はそれに対抗する力を求めて研究を重ね、一つの結論を導く。

力、つまり特殊能力を活用すること。一般的に悪魔と戦うには人
間自体に対抗手段はない。（あくまで一般的に。世界は広いので極

希に素手で悪魔を潰すヤツとかもいる)

そこで人間が考えた手段は悪魔に対抗するには悪魔の力を使ってしまうばいい、と。

『悪魔召喚士』。つまり悪魔を呼び出して戦うそれには二種類存在する。

『剣士』と呼ばれ、武器自体に悪魔を宿らせて魔法剣として武器を振るう者。これは肉体が強靱に出来ていて更に悪魔からの耐性が強くなければ宿り主自体に喰われてしまう。

『歌術士』と呼ばれる、いわゆる魔法使い。天性の素質で、呪文を唱える様が唄っているように聞こえるため、誰が呼んだか歌術士と呼ばれる。ただ呪文の詠唱時間が長いのが弱点。普通に戦ってる最中に「詠唱入りますからタイムです！」とはいかない。その詠唱時間を守護する契約をした悪魔達を総称して『守護者』という。

世界の悪魔召喚士達は『ガーデン』という傭兵機構に所属し、『等価交換』という名の暴利で世界中に派遣され、悪魔関連の問題を捌いている。

そして歌術士は生まれつき自分を護る『守護者』と呼ばれる悪魔と一緒に生まれてくる。逆に言えば悪魔付きの子供はその後の英才教育で無理矢理力を引き出されて歌術士になれると言うこと。もしも、歌術の才能に長けた子供が悪魔付きでなければその生まれ落ちた時点で世に蔓延る悪魔に喰い殺されてしまうから。

ごく稀に……不運にも守護者を持つて生まれてこなかった歌術士はガーデンに入れられて祭りなどの行事で歌うただの歌い手として飼い殺されて一生を終える。今のところそんな一生が約束された少女がここにも一人。

シール王国の北東、そこに『ガーデン』のシール支部はある。
古めかしい神殿形式の建物の中、ガーデンに在籍する『剣士』、

『歌術士』は大きな国の支部であることからあくせく働いていた。暇な支部は本当に暇らしいけど、このシール支部は世界一忙しい支部だ。凶悪事件担当の中央本部に匹敵してしまうくらい。

なのはどうして私はこんなに暇なのだろう？

ぼーっと窓の外を隊列組んで出ていく歌術士と剣士の混合チームを見つめていた。ハタから見れば深窓の令嬢が物思いに耽っているようにも見えるかもしれないが、こちらそんな次元はとくに過ぎてもう無心の境地。なまじ見目が良いせいで人気の多いトコでぼーっとしていると目立ってしまうから、あまり人の寄ってこない第3書庫の更に窓際は私の特等席だ。

今の季節は日当たりも良くて気持ちいいけど、毎日同じ場所の日向ぼっこばかりでは片面だけ日焼けしてしまう。……いや根本はそこじゃなくて……何もすることがないと言うことだ。もちろんこのガーデンには歌術士と剣士以外に庶務一般、雑務一般をこなす『学士』と呼ばれる職に当たる人間もいる。でも私は違う。違うから暇なのよ。

歌術士として試験に合格したって私には生まれつきの守護者がいない。それなのに神様は意地悪で、1000年に一人という稀な歌唱力をなまじくれてしまった為、一般催事で歌う歌術士にすら成れないなんて……。

歌うことが大好きで、それなのにその歌声が悪魔にとって凶器になってしまうから普通に歌うことすら禁止されてガーデンに幽閉されること5年。

生翠はすっかり年頃の女の子になりました。役目が待ってるただガーデンの中で待ち続けて年だけ食うのは嫌だなあ。せめて幸せな結婚をして子供と旦那様と幸せに安穩とした余生を送りたい……なんて15才で考えるにはまだ早いかな。

せっかく羨ましがられるぐらいの美貌に生まれて、絶世の歌声を持って生まれてきて、何故最後の一つのパーツである守護者が一緒に生まれなかったのかっ！？神様はすっごく意地悪だと思う。

ガーデンの修業時代、歌唱力テストのトップ成績で歌術士になったという過去の栄光はとうに消え失せている。

ガーデンに拾われた当初は天才的な歌唱力で10億人に1人いるかいないかの天才児とか、1000年に一度出るかでないか、とまで言われたのに虚しすぎる

実は守護者自体は一緒に生まれてきた。でも私の守護者は、普通の人間は勿論。ガーデンにすら手に負えない力の持ち主で生後一ヶ月とちよつとで封印されてしまったらしい。

私だつてそんなで歌術士になれるなんて思つてなかったから、見習い期間中は本気で剣士になるつもりで剣術まで習った。それがまた、趣味のレベルじゃないくらいに上手になつてしまったからすつかり『剣士』気取り。

それなのに歌術が使えるのだからとガーデン本科の資格が降りたのは『歌術士』だつた。多分その……『手に負えない悪魔』の関連を研究する研究材料として。

このままじゃ本当に学者連中の研究材料として一生を終えることになつてしまう。そこら辺の剣士には負けない自信があるから適当に襲つて魔法剣を奪つてしまおうか……それじゃ犯罪か。

と、馬鹿なことまで考え始めるしまつ。

「生翠！」
きすい

居丈高な呼びかけに少しムツとしながら顔を上げる。すると、その考えは頭から吹っ飛んで私は彼女に微笑みかけた。

「真珠、おはよう！仕事は終わったの？いつこつちに戻つてきたの？」

真珠は私より二つ上の『学士』で年が近いこともあつて仲の良い友人だ。

ガーデンには傭兵としての『悪魔召喚士』の他に、有能な補佐『学士』と呼ばれる人間がいる。悪魔召喚士を研究したり、悪魔自体を研究したり、それ以外にも一般実務のエキスパートが総称して『学士』と呼ばれる。

彼女は一ヶ月前に出張で地方にとばされていた。事件の下調べや後処理は『学士』の仕事だから、忙しく働いている人間が多いのだ。

有能な友人は両手に相変わらず魔導書を持ち、ずれた眼鏡に苦戦している。私を妹のように可愛がってくれる真珠とは、私が仕事ないばかりに『学士』の仕事、つまり雑務を引き受けるようになってからの知り合いだ。

「また…仕事なし？」

「いつも通りね」

「私もこれからしばらくはヒマよ。学士はいっぱいいるからね」

真珠はそう言っただけで私の隣の光が強すぎる場所、本を読むなら絶対に座りたくない席に腰掛けた。つまり彼女は図書室に本を読むためじゃなく私を探しに来てくれたということ。

「守護者がいれば…少しは違ってたんだろうな。少し…じゃないね。180度違うよねえ」

もうこれは口癖というか挨拶代わりの口上と化している。真珠も相変わらずの私の腐りっぷりに苦笑いした。この状態、周りだって本人だって良くは思っていないのだ。

真珠は書物をテーブルに置くと、ようやくずれた眼鏡を戻して言った。

「生翠、守護者って言うのは歌術士が弱い存在だから必要なのよ」

「え？…：うん。でも歌術士が弱いものって当たり前でしょ？」

「誰が決めたの？強くなればいいじゃん」

「え？」

「つまりね、自分で身を守るならば悪魔の力なんか必要ないのよ。今回そう言ったケースの報告を見に行ってたんだ」

「そんな人、いるの？」

「教会に見いだされなかった剣士の才能を持った人がいてね、その人は自己流でその村を脅かしていた悪魔を払っちゃったの。悪魔の憑いていない普通の剣でね」

真珠の見てきたその人があまりに強烈な印象を残したのか、楽しそうに彼女は語った。

「え？……じゃあ、例えば歌術士も唄っている間、自分で身を守れるなら『守護者』がいらないって事？」

「うん、多分ね」

「！？」

その時、私は全てを決めた。

その閃きが彼との出逢い、運命、全てを決定することになったのだ。

「じゃあ私、もっと強くなるっ！……で、いつか、きっと仕事に一人で出て見せるっ！！」

そして夢を実現させるのは2年後。

歌う為の剣術を使う新しい、第四の職『歌術剣士』として。

この時はまだ、何も知らない。

「生翠、ちよつと近くまでお遣い頼まれて。今、手が離せないの」
しわくちやの白衣姿の真珠がちよつと多めのお金とメモを手渡した。

彼女達『学士』は、時々その知識を利用した論文などを上に提出して科学の発展や研究成果を仲間と競っている。研究が忙しくなる
と真珠など風呂に一週間入らない事なんてへっちゃらしい。眉を
顰めてその姿を観察していると早く行けとばかりに手を払った。

こっちからすればまた怪しい研究に励んでいるのか、と毎回感じるだけだ。何を研究しているのかなんて興味はない。呆れ顔でその
メモにちらりと目を通す。

「んん？これは薬草？切らしたの？」

「うん。在庫なくて困ってるの。研究チーム全員、手が離せないからよろしくっ」

「いいけどね…どうせヒマだし」

「そう卑屈にならないで。余ったお金はお駄賃であげるわ」

「はあい。行つて来ます！」

あれから二年の月日が経ち生翠は１７歳になりました。歌術剣士としてガーデンの役に立つと決めた日から。……が、やっと『剣士』として認可が下りて、同時に『歌術剣士』として名乗りを挙げて半年。開店休業状態。いまだにヒマとはこれ如何に。

つまり二年前と変わらぬ、『学士』連中の雑用係の域をぬけていない生活を送っていた。

「気を付けてね、最近良からぬ噂が立っているし」

怖いことを言つて送り出す真珠を、振り返った。心配なら付いて来い！

妙な噂が立っている。それは報告を受けてガーデンも動き出していた。シール王国の外れにある小さな村で起こっていることだ。怪事件が度々起こる村ではあった。つまり、悪魔に狙われやすい場所なのだが。その村と連絡が一切途絶えたらしい。私設の調査隊が現地へ赴いたところ、村に一步も踏み込めずに帰ってきた。

そこでガーデンにやつと依頼が来たのだが、まだその依頼に誰が行くのかは決まっていない。ガーデンもややこしい手順というものがあつて、その為に依頼してすぐに解決に向かえるわけじゃないのだ。まず事件の数と悪魔召喚士の数、比が違いすぎる。つまり、空きの召喚士が出るまで順番を待つてからなのだ。わざと事が拡大するのを待つてるんじゃないかってくらい待たされた後に賃金交渉から始まり、調査隊である『学士』の派遣。次によく本隊である『悪魔召喚士』の派遣に至る。そういう事件のことを聞くと毎回感じる。なぜ私に行かせてくれはしないのだろうか？つて。

まあ………何にせよそこまで大きな事件は新人悪魔召喚士には回つてこない。勝手に向かえば懲罰ものだしメンドクサイ事には興味有りません。

「大丈夫、そこへは行かない」

注意を笑い飛ばしてその場を後にした。

『歌術剣士』となったのだ。成れたからには剣も持っている。相棒の名を『火神の刃』。細身の長剣で赤い力ある宝玉を埋め込んだれっきとした魔法剣だ。力なき者が扱えばその身こそ滅びるという結構危ないものである。もともと、その剣に精霊族の悪魔が宿っているため召喚の必要がない素晴らしい剣だ。

新人に回ってくるような剣ではなかったのだが、身内のコネと偶然の一致で結婚退職した女性剣士に譲って貰ったのだ。

身内のコネ、というのは私の従姉がガーデンのグランドマスターだと言うこと。ガーデンに入ると俗世との関係は断ち切る為、家と名字を捨てて名前を変えるから身内との関係は一切絶たれてしまうけど、ハーヴェット侯爵家の女兒は代々強力な歌術士を産む家系らしくコネクションみたいなのは根強く息づいている。正直言って出来損ないで一族の面汚しなのは分かっていただけ、従姉は喜んで『歌術剣士』になるのを応援してくれた。『歌術剣士』を第四の職に認めてくれたのも従姉だし、恥を忍んで中央本部に手紙を書いてみて本当に良かった。

柔らかいウェーブの掛かった金色の髪に巻かれたリボンを握りしめながら大きな翠色の瞳を潤ませて神様に願った。

ここまで私を困らせているのだから少しぐらい良いこと下さいっ！
剣を貰えても歌を歌えなきゃ何の意味もありませんからっ！

『大切な人の、人生の始まり、節目、門出、終わりの時にどうか花を添えさせて下さい』———ガーデン本部

世界中にこの広告が出ている。私達は世界中の行事を仕切る祭司である。

だが、本来の私達の仕事は傭兵機構なのだ。このふざけた広告は一刻も早く撤回願いたい。

もともと、『ガーデン』の制服は真っ白で目立つ装いなのだ。一般の人間にしてみればほんの一握りしか存在しない力ある人間は珍しいし興味の的になる。

だが、私は別のところで目立っていた。

『ガーデン』の人間はほとんど人里に降りてこない。『ガーデン』という場所、そこにいるだけで何でも揃ってしまったために滅多に私用の外出はしない。仕事の時は物々しい戦闘服で行くか市民に紛れて行くのが一般的だ。正装なら、公的行事に赴く最中だろうが、略式のしかもそれが買い物スタイルで、見たこともない美少女が街で買い物をしていれば誰もが驚くことだろう。それだけ、『ガーデン』自体が一つの街のような役割をしていて外に出なくても何不自由なく過ごせると言うことなのだ。

熱い視線を集めること自体は大好きなので無駄に笑顔を振り撒いた。

お遣いの内容は魔術書を一冊と薬草数種類。魔術書購入に訪れた魔導具ショップでもしつかりと目立ってきた。

分かつてはいたけど真珠は非情だ。

『ガーデン』の位置はシール王国の外れにある。シール王国は流通も盛んで、世界で二番目の大きな国だ。でも支部の一番近くにある街力ランには薬屋がない。そして他の街へ行けば日帰りでは済まなくなるといふ事実を知っていて私にこのお遣いを任せただ。

つ・ま・り、ここから探せ、と？

街から少し離れた場所にある小高い丘を目の前にし再び大きなため息を吐く。ここに生えている雑草から探せということだろう。しやがみ込みメモを再び眺めやった。何やら名前以外の説明書きが多いと思えばこんなことか。この場所どこを見渡しても店なんて見当たらないし、地図はここを指してるし、特徴でそれっぽいの持っていてこいつてことだろう。

彼女・真珠の性格は楽天的で大雑把だ。本当に緻密な作業を必要とする『学士』の才能を持っているのだろうか疑いたくなる。

だがその丘、実は薬草の丘でほとんど雑草などは全く生えていなかった。見るもの見るもの真珠がよく使っている薬草類。

『雪花草』、『わすれな草』その他数種類。魔導書を見つけるのより遙かに短時間でそれだけのものを見つけた。

だが、久々に降りた街に気を取られて魔導具シヨップで時間くつたせいか、全て見つけ終わった頃には日が傾いてきていた。

早く支部の『門』をくぐらなければ『ガーデン』の門限を越してしまう。そうなってしまうとこれを渡せるのは明日の朝だ。真珠が怒るだろうし、それにこっちも野宿は辛い。

「生翠さん、ですか？」

いきなり誰もいなかったはずの丘で声をかけられた。美しいテノール声。

気配も何もなかったはずなのだ。パツと振り返り、その者を確認する。

「…どなたですか？」

超絶美形のその男はだいたい年齢にして20代半ばぐらいの背の高い男。シールの人間にはない特徴の黒髪黒目で、切れ長の瞳が印象的だ。細身だが筋肉質の身体付きで剣を拝刀して立っている姿に強盗かと身構えた。近くへのお遣いだった為、自分の剣を持っていたいない事を後悔した。

だが、こんなに馴れ馴れしく軽々しく声をかけて更に私の名前まで知っているって事は『ガーデン』の関係者なのかもしれない。

そうでなければ誘拐！？

私をグランドマスターの身内と知った極悪非道のオトコ達が狙っている！？

なんて妄想に耽っていると首を傾げてその男は微笑んだ。

こんな美形な男なら誘拐されてあげても良いかも。暇つぶしになるかも？？

心躍るのを隠して引きつった笑顔を作り、精一杯の平常心で尋ねたのだ。

「どちら様ですか？」

「こちらにあなたが居るって支部で聞いたもので御挨拶に伺ったのですが」

「挨拶？」

「中央本部からグランドマスターより命を受けて参りました。あなたとはこれからしばらく組んで行動することになると思います。『剣士』の夜白やしろと言います」

「は？『剣士』？」

「はい。こつちでは新人なので慣れるまではこちらの流儀をよく知る人間と行動を共にした方が良くからってアナタと」

それって……………それって……………それって学士の仕事じゃああん！お従姉ちゃあんっ！ヒドイっ！！

心の中では大絶叫しながら平常心を装って微笑んだ。

「私はまだ伺ってません。こんなトコに來られても困ります」

「荷物でも持ちますよ。俺も雑用させられてる『歌術士』なんて珍しいから見に來ただけだから」

目の前に雷が落ちたような感覚がした。こいつ……………逆鱗に触れやがった。

荷物をパパッと纏めると足早に門のある方に進んだ。夜白はピツタリと付いてくるところか私を抜かして小走りをはじめた。

「ちよっ……………」

「そんな荷物持つてて門限までに間に合うのかよ」

って余裕の顔で笑う夜白は不覚にもカッコイイと見惚れてしまいました。いやいや、そんな場合じゃないし。

残り時間あと五分。お役所仕事の門番は絶対に一秒たりともまけてはくれない。

こんな男と野宿になるのは確かにご免だ。

形振り構わず猛ダッシュした。残念ながら運動神経はとても良い自信がある。

あっさりと夜白を抜かして激走。門番が閉めようとしていた扉の

中に滑り込んだ。肩で息をしながらガーデンの在籍証明書を門番に見せて帰着を報告する。門番もいつもの私と違う乱れた状態に驚きながら帰着を認めた。

夜白は間に合わなかっただろう！ザマーミロ！

と振り返ると息切れもせず余裕の面持ちで帰着証明を行っている。

「なっ！？アンタ……………っ！いつの間に……………」

「生翠さん、髪の毛乱れてるよ。オンナノコなんだから身嗜みに気を付けたら？」

「う……………なっ……………」

悔しくて声にならない声で呻いた。身嗜みにはこれでも人一倍気を遣っていて、流行にも敏感で、これでも支部内には親衛隊とかあるし、容姿にはものすごく自信があったのに！でも確かに顔を真っ赤にして全速力で駆け込んだ私はいつもの私らしくない。イレギュラーなんだから仕方ない。

自分をそう慰めていたら夜白は余計な一言を残して行った。

「あれだよ。人間追いつめられると本性出るから」

私の中の嫌いゲージは溜まったぞ。ぶっちゃけ容姿のことでバカにされると他に実績のない私は本当に全否定されてるとオンナジだからね。

肩をワナワナと震わせて夜白に続いて『ガーデン』の本殿へ入った。

一際高い天井の中央廊下に明らかに不安げな面持ちで右往左往している白衣の姿を見つけて気分が少し回復した。身長の高い夜白の後ろから手を降って顔を出すと彼女はすごく安心した面持ちになった。真珠はさっきまで研究にしか目に入ってなかったはずなのに帰りが遅いのを心配してここまで迎えに来てくれたらしい。

「生翠、遅い！」

「ごめえん。真珠、これで揃った？」

頼まれ物を手渡して微笑む。確認して真珠がさすがだねって目を

細めた。

ようやく真珠は夜白を見つけて私に尋ねた。こんなに美形で身長が高く目立つ人なのに研究一直線の友人には関係ないらしい。

「生翠、この人は？」

「真珠、私に聞かないで！突然迎えに来たんだから………って真珠が私が外にいるって教えたんじゃないの？」

「ナンニモ。30分前まで研究室に籠もってたし」

「ひ、ヒドイ………心配してくれたんじゃ」

「したした。この薬草が今日中に手に入らないと全然進まなくて…

…」

「もういい」

「うつそ！生翠のことだから面倒事に顔突っ込まないか心配してたんだよ！」

「ホントウ？ちゃんと心配してくれたあ？」

「ホント！」

そう言ってこの年上の友人は宥めるように頭を撫でてくれた。まあ、騙されてやるか………と機嫌を直す。夜白を振り返ると口許に指を当ててナイショ、と口パクした。

今更カッコつけたその仕草にムツとすると後ろから門番が施錠を済ませて上がってきた。

「あつ、生翠と合流出来てヨカッタネ、新入りさん」

「さつきは出場記録見せてくれてアリガトウ」

「いえいえ。これからよろしく」

と軽々くネタあかしして門番が通り過ぎていった。悪ガキが悪戯をばれた時みたいに舌を出して笑った。

（なんか………カッコツケ、キザ！私あいうのヤダっ！）

因みに同族嫌悪だということも重々承知している。人から見られた自分を意識して行動しているような仕草が自分にも心当たりがあつて、そういうのを他人がやってるのを見ると虫唾が走る。

因みに、私は良いのよ。だって戦いの場の『ガーデン』にだって

華は必要でしょ？でもね、可憐に咲く一輪の花は一輪だから価値がある！一つ以上は要らないの！

そしてコイツは相乗効果のあるような美形ではなく、隣に立つと私が霞む！

（だから嫌あい）

今日会ったばかりで全て決めつけるのは申し訳ないが私に好かれなかったら容姿を謙虚にしてくれ。私の隣に立つ人間は見目の悪いのは嫌だけど光りすぎてるのはもつと嫌だ。

「あつ生翠、支部長が帰着したら執務室に来いって」

「ん？なんだろ？任務かなあ！任務だと良いなあ」

と鼻歌交じりに真珠に手を降って中央廊下を真っ直ぐ歩き始めた。隣を歩く夜白がクスリと笑う。

「何よ？カンジ悪いわね」

「どつちが？」

「私は敵と見なした人間に愛想振りまく事はしない！」

「ああそう。俺はあいにく鼻歌がキレイだと思って聞き惚れてただけだよ」

って夜白が言った。突然誉めるから心臓に悪くって……慣れないドキドキを感じる。

見れば見るほど整って綺麗な顔立ち。隣のカリスト帝国の血筋に多く出る黒髪黒目が際だって見えた。耳元ぐらいまでの髪の毛から少しはみ出たピアス。二つの穴を繋ぐチェーンの形に覚えがあつて手を伸ばす。

「何？」

私が耳なんかに手を伸ばすから夜白が怪訝そうにこちらを見た。そりゃそうか。

「あー、なんか私のピアスに似てるから」

「どこにでもある形じゃない？」

「そーお？あんまり見ない形だと思っよ？私のは生まれた時に母親がくれたんだって！夜白のは？」

「…………ほら、執務室に着いたよ」

ピアスのことは喋りたくないのか、少し不機嫌そうに誤魔化された。支部長の執務室を夜白がノックした。

「え？つてかなんでアンタまで……………」

「はじめは支部長からオマエを探して来いって言われたんだよ。散々探させやがって……………」

ピアスとどっちが不機嫌の原因だかはわからないが彼は乱暴に舌打ちして執務室の扉を開く。

部屋の奥の執務用の机につく40代半ばくらいのおひげがチャーミングな小柄な男、このガーデンの支部長である黄^{おっい}以様だ。

従姉の権威のお陰で支部長とは茶飲み友達になりました。気易くものを言える間柄でお父さんみたいに慕ってる。夜白の後ろから先ほどと同じように手を振った。黄以はこちらに気付いて人懐っこい笑顔を向ける。

「生翠お帰り！朗報だよ」

黄以は開口一番そう言った。ヤツタ！間違いなく任務だ！

「初任務だ！夜白と一緒に」

「嫌です！」

「ええーっ！？これ断ったら一生ないよ？」

「一生無いんですか？！ヒドイ、パートナーくらい選ばせてクダサイ」

「無茶言わないで。君みたいな難しい条件のコを外に出せる相棒なんて滅多にいないんだから」

「だって、だって、だって！」

コイツ性格悪いもん！顔良すぎるんだもん！

どれも大人の世界で通じない理由だと言うことは分かっている口に出せなかった。

「でもねえ、この人グランドマスターの命で来てるんだよ？分かっている？生翠の為に中央のエリートだったのに、この雑務で忙しいだけのシール支部に飛ばされちゃったんだよ？生翠の為なのに、生翠

の為なのにい」

「いや、二回言わなくても聞こえてましたから」

「任務、行くよね？僕たちだって君にずつつつとタダ飯喰わせて肩身の狭い思いさせるのは可哀想だって思ってるんだよ？」

「はあい。行きますう、行けば良いんデシヨオ」

いじけ気味に返事をする夜白は一度こちらを横目で見て、すぐに黄以の方に視線を移す。

「夜白君、じゃあこれが生翠だ。能力としてはトップクラスの『歌術士』だけど守護者がいないから戦闘には出せないタダ飯喰らいだよ！」

「承知しました。タダ飯喰らいですね？」

だから何度も言わなくなつて分かつてますってばっ！
涙目になりながら黄以から任務の指示書を受け取った。

受け取った指示書は担当窓口に提出すると任務の詳細資料を渡される。『学士』が介入しているような事件なら調査資料を。そう言った調査を含めての任務なら依頼人から契約書の写しを渡される。今回は契約書の写しが渡された。

窓口の『学士』が夜白に見惚れているのを咳払いして説明を急がす。

「ええつと……生翠・夜白組ですね？この任務は街の領主の息子の結婚式で賛美歌を歌うだけです」

「だけ？」

夜白がこちらを見遣つてそう言った。凄腕『剣士』様には物足りない任務かもしれないが私がガーデンの外で公明正大に歌えるのなんて生まれて初めてだ。ウキウキしながら契約書を受け取った。仕事を選ぶ立場の人間には一生この気持ちは解らないかもしれないね。

「あ、夜白さんにはもう一通。あとお二人の拝刀指示書です」

「ああ。ありがとう」

夜白は窓口のおねえさんに微笑んでもう一通の指示書と契約書を受け取った。多分仕事の帰りに他の任務を拾って帰ってくるのだろう。有能な方は良いねえ。

夜白の隣にいるとなんか卑屈に輪を掛けてるみたい。普段『悪魔召喚士』の友達がいらないから余計に思ってしまう。……私、ホントウに役立たずなんだって。

ふくれっ面していると夜白の手が頬を抓った。

「イタタタっ！顔腫れたらどうしてくれんのよっ！」

「このぐらいで腫れないだろ！ってか意外に顔に肉付いてんのな」

「アンタ失礼よ！」

「オマエだって十分失礼だよ。俺は自己紹介したのに……」

「あ……っ」

「まあマスターから嫌って程聞かされてるから今更だけだな」

何を……なんて聞かなくても分かる。お従姉ちゃんの言いそうなことは私のダメさを並べ立てて、いつまでも子供だって語ったに違いないんだ。

そりゃ、自己紹介も挨拶もしないで礼儀はなってないし、会って早々取り乱した姿を見せたし、支部長にタメ口利いて……私って最低。

「夜白……さん、私はシール支部『歌術剣士』の生翠です。この任務が初任務になります至らない点も多いと思いますが宜しくお願います」

と頭を下げた。そんな自分を見た夜白はふわっと優しく笑って頭を鷲掴みにしてワシャワシャと掻きまわした。

「オツマエ可愛いなあ！」

って夜白は破顔した。

どっちが、だよ！髪のをクシャクシャにしたことを怒ろうとしたのに毒気を抜かれて更に赤面してしまった。なんか悔しいっ！

結婚式に併せての出発の為前乗りしていくとしても出発日は一週間後だった。

一夜経って冷め止まぬ興奮も、有り余るパワーも虚しくそれまではやはり暇で空振りした。一週間で必ず終わる任務なんて急にはないから、結局夜白と二人。暇を潰していつもの書庫でボケーツとしているしかないって状況。

「生翠！初任務だって？」

ヒョコつと現れたヘビーフェイスのオトコノコ（と言ってもタメ年だ）。自称生翠×真珠親衛隊隊長の英里^{えいり}だった。小柄な彼は私より余程同性からも異性からもファンが多く、でもツンデレお嬢（私）×メガネっ娘（真珠）を高らかに掲げてオツカケをすることでファンをドン引きさせている。その実、別に私に恋愛感情を抱いていないのはよく分かるから……まあカモフラージュにされてるんだろうな。

そうそう。私より光らないし、私と並んで遜色のない美貌の持ち主。こういうのが理想なのよ！夜白じゃこっちがドキドキさせられてしまうから。

「生翠？」

「ああ、ゴメン。一週間後にアサスに行くよ。近くだけ外で歌える初仕事！」

と自然と零れる笑顔で言う英里はヨカッタネエって微笑み返した。まあ素直で可愛い弟分みたいなもんだよね。

「英里、こちら夜白。しばらくは一緒に組むことになったの。中央本部で『剣士』をしていたんだって」

と向かいに座る夜白を紹介した。身長の高い夜白が立ち上がって腰を屈めて右手を差し出す。

英里はニコツと微笑んでその手を取った。

「シル支部『学士』の英里です。生翠のこと、ヨロシク。愚かで可愛いけど本当に暴走するヤツだから」

「ああ、それはなんとなく……。中央本部から異動してきた『剣士』の夜白です」

なんか軽々くまたバカにされた？私って……。

古くからの知り合いに罵られて少し凹んでると英里が頭を小突いた。

「生翠、お茶飲む？」

「うん！」

「待ってて、今日はベリーの香りのお茶が手に入ったから。もうすぐ真珠も来るし」

「うんうん」

私は一日でこの時間が一番好き。『学士』が休憩に入ると必ず真珠と英里は私が暇を潰しているこの書庫にお茶やお茶請けを持って集まってくる。見た目の良い私達が集まるとそれを見たさに親衛隊達も集まってくる。人が好きな自分の周りが一番賑わう瞬間だ。

暖炉の火でお湯を沸かしている英里を余所に夜白は外に視線を移していた。

夜のうちに積もった雪を見つめて不思議そうな顔をしている。

「夜白は雪が珍しい？」

「中央本部には降らないからね」

「温暖気候シールとはいえ、ここは北の方だから時々雪も降るし……でも春も夏もあるよ。暖かくなったら泳いだりも出来るし四季が楽しめて良い所だよ。中央はただアツイよね」

「覚えてるんだ？」

「え？」

「中央に居たのって10年以上前だろ？」

「よく……知ってるね？もしかして会ったことあった？」

「さあね」

伏し目がちに微笑んでそのまま誤魔化された。どうも彼は自分のことを語りたがらない。どこまで従姉から聞いているのか、全くこちらを尋ねようもしない。それでいて全部知っているようなその

漆黒の瞳に見つめられると……訊かれてもいないのに全て話してしまいたくなるような……。

嫌いつて思ってたはずなのにいつの間にか一緒にいるし。

すっとん入ってくるような不思議な感覚。

パタンと扉が閉まる小さな音がして静かに真珠が入ってきた。書庫の中をお茶の良い香りが充満し始める。

「生翠、初任務おめでとう」

「アリガトウ」

まだ成功した訳でもないのに友人達は口々に祝いの言葉を述べていく。それもこれも自分の境遇のせいなのでそこら辺は温かい目で見守って頂きたい。

夜白と自分の前に腰掛けて今日のお土産だと言ってカップケーキをテーブルの上に置いた。

「あと、さつき配達の人に逢ったから預かってきたよ」

と真珠が机に置いた小包を即座に受け取って中を確認する。真珠は特に興味が無さそうにカップケーキをみんなに取り分ける。

丁度そこへ英里がお茶を用意してこちらに向かってきた。私の手元を覗いて怪訝そうな顔をする。

「ナニソレ？」

「これ？注文してた髪飾り！今、巷で流行ってるのっ」

「ってか……生翠……それパチモンだよね？」

「パチモンだろうが本物だろうが可愛ければ全て良し。第一ブランド品が欲しくても任務をしていない薄給の私がそんなの買えるワケないし」

英里が非難の目を向けた。それでもめげずにキラキラ宝石（ではなくガラス玉）のついた髪飾りを見せびらかすと夜白が吹き出すように笑った。

「笑うなっ！」

「だってオマエ、目輝かせすぎ！」

「だってこういうのが好きなんだもん。可愛く着飾って可愛い私が

大好きなんだもん」

長くて綺麗な指が私の手から髪飾りをそつと奪って髪の毛の方に当たった。

「似合うよ」

「あ、あ、ありがとう」

「着けてやるから頭貸せよ」

「えっ！？い、い、いらない。自分でやるし」

断ったはずなのに問答無用で髪の毛をいじりはじめた。耳元の髪をを梳く手が優しくて気持ちいい。嫌がつてるのも口だけで身体は大人しく夜白の方に傾けていた。

「はい出来た。可愛い」

サラツと耳元で誉めて身体から手が離れた。窓辺に移る自分の姿を確認して器用に編み込まれた中に刺された髪飾りを確認した。

「アリガトウ、キレイ、どうやったの？」

「ん？秘密」

「この髪型！またしたいから教えて！」

「髪飾り持って来ればいつでも俺が着けてやるよ」

「えっ！？……じゃあ、要らない」

と言うと夜白は苦笑してお茶に口付けた。

どうも夜白の距離が恥ずかしい。このヒト、私のテリトリーに踏み込みすぎじゃないか？会って二日の距離ではないと思う。

顔が熱くて手で仰ぎながら目を反らした。

「で？生翠、任務は何？」

一通りの茶番が済んだのを確認して真珠が落ち着いた口調で尋ねてきた。その言葉でテンションが上がり資料を取り出して説明を始める。

「アサスの領主の息子が結婚するらしいんだけどその賛美歌を歌いに行くのお！歌唄えるんだあ」

「へえ、領主の息子の結婚式……ずいぶん金掛けてやるのね。『ガ―デン』の歌い手と呼ぶなんて大掛かりな」

「うん！なんか領主の交代の儀式もやるらしいから街をあげてのイベントにするんじゃないかしら？」

「生翠、それこそ衣装は？」

「いや……ドレスなんか持ってないから『ガーデン』の正装で行きます。アレなら一応正式な場で認められてるし」

「式の流儀もその土地土地で違うからそれが無難だね」

「あつ！でも髪飾りはこれ付けていこうかな？」

「っていったら英里と真珠が全力で止めた。真実の愛を誓う結婚式にパチモンを付けていくなっ！だってさ。」

「良いじゃん、可愛いんだし私にはホンモノとオンナジだってば。」

悠久の箱庭／ガーデン（後書き）

元々の聖歌伝のあらすじとずれてくるのは、二章からです。

ここまではほぼ高校生の時に作ってあった文章を改稿しただけなので。

二章から先の話は随分違うので、ボツネタを一丁。

本来は守護悪魔だった社（現・夜白）との恋愛物語で、夜白くんが人間剣士であるところから全然違ってきます。もうきつと本筋戻すのは難しいので。

春待ちの街／アサス（前書き）

かなり時間が掛かったんです。

設定通りに上手くいかなくて……。

苛々したんです。

なんとか辻褄合わせてこぎ着けたラストなのでぜひ最後まで読んで下さい。

春待ちの街／アサス

？・春待ちの街／アサス

季節は冬。南の国シールと言えども最北に位置するアサスの街は一年の半分を雪が包み込む。日照時間も少し南にある『ガーデン』とえらく違うし、極寒の地ってこういうのを言うのだろう。名産品はリンゴと針葉樹、それに狩りで獲れるキツネ。深い森の中にある街だが、森自体が産業になっているらしい。雪の中での狩りは特に大変そうだな、と他人事。

ここよりは多少暖かく安定した気候の『ガーデン』で暮らす私達はこんなドカ雪も初めてで、更に湿り気のないさらさらの雪はいつもの雪より暖かそうにすら見えた。ホワイトウェディングってのも私は有りだなあ…。

と、街の中央に立つ立派な教会を見上げて感慨にふけっていると後ろから剣の柄で小突かれた。

「寒い！」

「そんな事言われても冬だから仕方ないじゃん」

「寒い所は不便だな」

「これって不便っていつの？ どんだけ恵まれた場所に居たわけ？ 第一、暑いのは暑いので嫌じゃない？」

「暑いとな、みんな薄着で露出高くて目の保養に良いんだよ。生翠も夏になったらお出で」

「夜白って…」

セクハラ紛いの発言に不信そうな目を向けると夜白は誤魔化すように微笑んだ。

笑顔に怯んだその隙に夜白の器用な手がゆるいウェーブの掛かった私の髪の毛をすくって編み込み始めた。

「なっ……なにっ!？」

「何って……生翠、君が目立ってどうするんだよ？朝から熱心に髪のをセツトしてたみたいだけど主役は花嫁だろ？今日が式じゃないけど控えめにした方が依頼人には好印象だよ」

せっかく初任務に気合い入れてオシャレしてきたのに、短時間で夜白によって二つのオサゲに作り替えられてしまう。前髪は七三に分けられておでこを全開にした状態でピンをピシッと留められた。ダサさをこれでもかって増長。どこから出したか瓶底メガネを目元に掛けさせる。そんな最低センスの持ち主は私に視線を合わせると天使の笑顔でヨシっ、と満足そう。

「何がヨシ？何にもよくないっ！ここまで地味ダサにする必要ないでしょ！？地味は分かる！『ダサ』は要らないのっ！」

「え？可愛いよ？このメガネが特に似合って可愛い」

と臆面もなく言われて言葉を無くしていると私の元にも遅れて寒さが到着する。こんな広場で着せ替えゴツコをするには少しこの気候は過酷すぎた。

寒さに耐え兼ねてか、モンクを封じる為か、夜白は私の腕を引いて街一番の屋敷に駆け込む。

ここが依頼人のクルーニー男爵家だ。アサスの街を治める領主の家だけあって屋敷構えもしっかりしている。

大きな扉の前に立つ使用人にガーデンの身分証を見せて入館の許可が出る。なんだか物々しい気がするが結婚前でバタバタしてるだけだろうか？

夜白の腰から下げてる魔法剣と私の背負ってる魔法剣をジロジロと見つめて…。

「魔法剣は悪魔以外には反応しませんよ。鞘が被ったままじゃ何の役にも立たないし、物騒なことは出来ませんから」

サラッと夜白が剣を抜く素振りを見せて抜けない事を確認させる。ただの使用人にはとても見えない腕っ節の強そうな…ゴロツキみたいな男達を納得させると掻き分けて中に入った。

夜白はさすが中央から来ただけあってこんな事には顔色一つ変え

ないが私はなんだか怖くなって夜白の服の裾に掴まった。

「生翠」

って、私の様子に気付いて手を差し延べられた。さすがに仕事場になるとここで手を握るのは恥ずかしいから首を横に振る。

「あの…ありがとう」

「ドウイタシマシテ。ゆつくりめに歩くよ」

奥に進んで一番豪華な部屋に依頼人は居た。

私がこの前注文した（こちらは真正正銘本物の）髪飾りを惜しげもなく頭に2本も突き刺した釣り目の銀髪の婦人。その前に腰掛ける銀髪の青年。

親子だなあって一発で分かる容姿だ。婦人もキツそうな顔立ちだが綺麗な方なので青年の顔立ちも整っている。

「こんにちわ。『ガーデン』・シル支部から派遣されてきました『歌術士』の生翠です」

とお決まりの挨拶を本来ならうつとりと見惚れるような微笑で……だが如何せんこの七三デコッパチダサ眼鏡……。まあ可笑しくない程度のお行儀の良さで挨拶を済ませた。

夜白は、後ろから再び天使の作り笑いをかまして「ボクは補佐です」……てっ！アンタが一番主役を喰ってるわ！アンタこそ少しは隠してこいっ！

美形親子が霞むくらいの有り得ない造形だと言うことを実は本人が自覚していないのだろうか？夜白を直視した後じゃ、もうそこら辺の町人A、Bにしか見えない。

奥様が夜白にうつとり見惚れてるうちに、私は出来る女らしく仕事の話を進めることにした。

青年の方に目を合わせると見定めるような視線が返ってくる。初対面でのその無礼さに多少は顔に青筋が立ったかもしれないがご愛敬。それでも平静を装って「この度はおめでとう御座います」と祝辞を述べた。すると彼の表情は一転して好意的な人懐っこい笑顔がこちらに向けられる。

「ありがとう。僕はノアール・クルーニーです。式まで宜しく」

「ご依頼はノアールさんの結婚式で賛美歌を歌うことでしたね？早速ですが曲に何かリクエストはございますか？」

「僕は特にはないです。セレナの………婚約者の望むように歌ってあげてください」

「かしこまりました。セレナさんと仰るんですか？幸せな方ですね」「え？」

「こんなに、一番に名前が出るくらいに思ってくれている人と結婚出来るなんて、すごく幸せな方だと思います」

『顔良し』、『金持ち』、『相手のことを思ってくれる』三拍子揃った旦那さんなんて私の理想に限りなく近い。

感動して興奮気味に褒め称えた。

ノアールはそれに対して微笑しながら話を濁すと、「そのセレナですが………」とセレナ嬢に会いに行く提案を、複雑な表情を浮かべて口にした。

私、馴れ馴れしかったですかね？今、話し流されましたよね？

『理想通りの旦那様の婚約者』セレナ・リンチはアサスの由緒ある商家の一人娘だった。

領主の屋敷ほどの贅は費やしていないが品のある屋敷の一室に……立て籠もっていた。

（何故？）

ついさっき羨ましいとまで思っていた境遇の彼女の奇行には、ただただ首を傾げるばかりだ。

「わ、私、『ガーデン』の『歌術士』が来ないのなら結婚できません！」

震えたか細い声で扉の向こうから主張するのは婚約者のセレナ本人なのだろう。何も問題無いと思っていた結婚にも問題はあるようだ。貴族ならではの政略結婚？ワガママ？なんだか分からないがこれでは話が進まない。

ノアールが扉の前に立って優しく声を掛ける。

「セレナ、『歌術士』の方が僕たちの為に来て下さったよ」

「えっ！」

セレナの動揺ともとれる声。

直後、扉は開かれた。儚げで美しい女性が顔を覗かせる。この街一番の美人と言って過言ではない女性だった。だからこそ彼女がどうしてこんな強行手段に及んだのかが分からない。

ここぞとばかりにノアールはセレナを部屋から引っ張り出して、「僕の婚約者です」と紹介した。

困惑気味の表情を見せるが体裁を考えてかセレナも軽く挨拶をする。

「歌術士様！」

とセレナは夜白に向かって呼び掛けた。

「あの…『歌術士』は私です」

私の事はオサゲデコツパチダサ眼鏡効果で全く彼女の視界から除外されていたらしい。こちらを振り返って驚いた顔を見せる。

自分がちよつとくらいキレイだからって腹が立つ！これが私の本当の姿だと思ふなよっ！

……… 心の中全て呑み込んで、怒りを隠しながら口の端を持ち上げて自己紹介をする。

「『ガーデン』・シール支部『歌術士』の生翠です」

「俺は補佐の夜白です」

鬼のような形相の私と、天使の作り笑いを一向に崩さない夜白。

セレナ嬢は明らかにうさんくさそうに私の頭から足元までじつくり眺めた。

アンタの為にこんな格好してるのよっ！私だって本当は着飾りたいわっ！！

心の叫びは大きくなる一方だがグツと抑えてようやく営業スマイルを貼り付かせた。

「式が終了するまでよろしくお願いします」

「……………アナタはチェンジ！あ、補佐の方は残って良いですよ、ぬあつ！？こつちが下手に出ればそれかい！！？」

「あ…何がお気に召さないのでしょうか？」

「え？だって式でそんなダサイのが参加するのは恥ずかしいでしょう？それにアサスでは式の準備を歌い手にしていただく風習があります。ドンくさそうなアナタにはとても任せられません」

決め付けて掛かるセレナに引きつりながらも言う。

「わ、私も一生懸命やりますし、ダサイのがダメなら直します」

ここで契約破綻になんかせせない！一生懸命に説得した。

だってようやくの初任務で、ようやくの晴れの舞台がこんなワガママ女に消されてなるものかつ！？

第一、この任務を私が出来ませんでしたと断ったところで『ガーデン』から他の『歌術士』が派遣される事はない。一介の結婚式に公式認定された『歌術士』が出て行くなんて普通の依頼料じゃ有り得ない。『ガーデン』の『歌術士』が依頼で唄いに行くなんて王族クラスの国を挙げた結婚式だけなのだ。

依頼があつて、契約の金額が破格に良くて、更に暇してる『歌術士』である私が有りき…の、この依頼。

ここで破綻させるにはまだ早いはず。

「準備ですねっ！！？ノアールさん、一応術士の拘束時間が長くなれば延長料金も発生します」

夜白は、私達女二人が火花を散らしている後ろでニコニコしながら算盤を弾いてノアールと値段の交渉を始めていた。

こちらとしても契約続行に異存はない。ドンドン賃金上げちゃってよ！

賃金交渉も心配ないみたいだし、物凄く不機嫌そうにメンチ切るセレナ嬢に少し大人になつて柔らかく問いかけた。

「何がご希望なんですか？」

「……………春の庭」

「へ？……………え……………結婚式は一週間後ですよ？」

「私、昔から夢だったのっ！花咲き乱れる中で幸せな結婚式！」

「え！？つまりガーデンパーティーをするってこと？？この寒空の中？バカじゃないのっ！？」

「寒空は生翠さんがどうにかして下さるんでしょ？『歌術士』ですものね？私、楽しみにしてますね！」

とセレナは美しく……意地悪そうに微笑んだ。

私はと言えば啞然として口を開けたまま固まってしまった。

雪の降るウェディングが素敵だと思ったのはつい先刻の事だ。だが常に雪に覆われているような北国の民にそれは通用しない。

世論というものを嫌と言う程思い知りました。人間無い物ねだりをするものですから。

でも特別な日には特別なことが起こって欲しいという乙女心は理解しよう。

やる前から諦めるのは好きじゃないの。花嫁は気に食わないが努力はしようとも！

アサスの図書館で春の花々の本を根こそぎ借りてきて、宿に籠る。コンと一回ノックが聞こえて扉に視線を移した。扉が開かれて夜白が顔を覗かせる。

「生翠、食事に行こう」

「夜白：アナタはただの旅行気分かもしれないけど……」

「何？大変なの？俺は『歌術士』の仕事はよくわからないけどさ」

「たあいへんなのっ！今から花を各国から取り寄せて……焚き火で温かくして……あ、温室とかじゃダメかしら……？？あっ！賃金交渉はどうなった？」

「拘束時間プラス経費で上乘せしてもらったよ」

「『学士』みたいな交渉ごとさせてごめんね」

「まあ、任務においては俺が先輩なんだからこういうことは任せなよ」

「ありがとう！……夜白、眼鏡も返すね？セレナさんはこれ気に食わ

ないみたいだし」

「眼鏡は掛けときなよ。『出来る女』風の髪の毛に結ってあげるから！」

と、また眼鏡を無理矢理手に返された。

「夜白そついう問題じゃ……」

「傍目から見ても、花嫁より綺麗な介添え人ておかしいよ。失礼に当たらない程度に地味に！生翠は目が可愛いから目は隠そう」

「キレイ？カワイイ？そーお？そーだねえ、髪型をすっかり決めてけば大丈夫だよねえ！うん！そーする！！」

夜白は私の返事を聞いて、突っ返そうとした眼鏡をそつと顔に戻した。腰を屈めて目を合わせると目を細めて微笑む。

いちいちドキドキするくらいの距離。

この人のが私よりよほど変装が必要だと思っけどね。

（花嫁が本気で惚れたらどうするんだよ……）

「と、ともかく、夜白、ご飯は一人で行って？私は今日中に色々計画立ててセレナさんに承認して貰ってから食べる」

顔が熱いのを必死に隠しながら仕切直しの言葉を口にした。

早く計画を通さないと花を取り寄せるにしろ時間が足りない。ご飯を悠長に外に食べに行く時間も、ダラダラと夜白と話す時間も、無い。

「そ？なんか買つて来ようか？」

「計画立てたら自分で買いに行くから大丈夫だよ！夜白は本番までゆつくり休んでて？」

「分かった。じゃあ取り敢えずセレナさんが気に入るように髪の毛を結い直そう」

と私の返事を待たずに夜白の手は髪の毛をすくい上げる。

優しいその手に逆らうことはせず、少し熱を持ったその指先に酔いしれた。

リンチ家にはその晩のうちに再び訪れた。

夜白に髪をアップにしてもらい、例のパチモン髪飾りを刺すと少しだけ洗練された気分。プチゴージャスッ

ダサ眼鏡は相変わらずだが、身なりを正したお陰で一人で尋ねてもリンチ家の門戸は開いた。

だがこのお嬢様は一筋縄ではいかない。只今、花やら植木やらを他国から搬入して春に近い状態を作る案をプレゼンして…叩き返されてる真っ最中だ。

笑顔も凍る鬼畜なダメ出しにいつキレれば良いのか……キレどころすら掴めない。

「私が何の為に『ガーデン』の『歌術士』を呼んだのか全く分かってらっしやらない！」

から始まり、無能な人間を回されたアサスが馬鹿にされてるだとか…結婚式にケチをつける気だとか……ありとあらゆる罵詈雑言その中でも一番力チンと来たのがこれだ。

「あなたの見掛け通り……フッ（鼻で笑い飛ばして）……の平凡な案ね」

だーからー…

セレナの綺麗に着飾った頭をクシャクシャにしてやりたい衝動に駆られた。

グツと我慢して引きつった笑顔で問い掛ける。

「どういったものならお気に召していただけますか？クルーニー家からは経費の上限は決められておりませんので多少の無茶もきけます。私は……一般庶民の貧困な考えしか持ち合わせておりませんのでセレナ嬢とは考えがそぐわないかと。是非良案を！」

これでもかっ！と嫌味を混ぜ込んで。

セレナはそれに対して平然と言った。

「あなた、魔法使いでしょ？私は最初に言っただわ。春の庭！季節を変えて欲しいのよ。温室作って欲しいなんて言っただわいし、温室なら技師に造らせた方がよっぽど上手くいくわ」

っんな無茶苦茶が通る訳ないだろうがっ！！じゃあ結婚式の日取

りを変えろーっ！！

……って、もしかして…

「セレナさん、もしかしてあなた結婚式挙げたくないんすか？」

「！？」

「だから無理難題を吹っ掛けてるのね？歌術士と言ったのもそのせいなの？」

「……ち、がうわよ！ちゃんと努力しないでおいて人のせいにしないで下さい！」

結局のところ憤慨したセレナに家を叩き出されてしまった。これは少し周りに聞き込んで調査を行った方が良いのかもしれない。

（帯刀…していくか）

一度宿に戻って剣を掴んだ。服も『ガーデン』の制服はやめておこう。

何やらこの街は物騒な感じがして、ちょっと出掛けるだけにしろ剣を手放せない。魔法剣は人間への殺傷能力がないに等しいが木刀代わりにはなるし、普通の剣と勘違いしてくれたら防犯にもなるだろう。

酒場に聞き込みに行く、それだけが用心にはこした事はない。

『歌術士』……歌い手は希少価値が高くて人身売買組織に売られたら高額商品間違いないだ。なるべく周りに紛れるような格好を選ばねば。

隣の部屋をノックして夜白を呼び掛けた。

「夜白？いないの？」

まだ食事から戻っていないのか彼の部屋からは気配を感じなかった。酒場や繁華街に変装しているとはいえ未成年の女の子が一人でふらふら入るのはためらわれるのだが、時間がもったいないから後込みしてる場合ではない。

宿のマスターに出掛けることを伝えて足早に酒場に向かった。暗くなるとアサスの街は繁華街の様相を濃くした。

あちこちで娼婦と思しき女が立ち、あちこちで乱闘や乱痴気騒ぎが起こっている。

正直言つて私、世間知らずな自信がある。初めて見る繁華街は普通かどうかは判断が付かない。身売る女性がいることも話しには聞いていたが、繁華街つてこんなに物騒なんだなあ。

あんまり深く入り込まないように近場の酒場に入った。

こういう時は夜白が貸してくれた眼鏡があつて良かったな。ダサいおかげで娼婦扱いはされない。

マスターの近くに座つて、見ない顔だね、とか言われながらビールをオーダーする。未成年だけど飲まないと浮くし仕方ない。

(と、言いつつ………初めてゝっのおっ酒ゝ)

任務に託けて呑もうとしてますともゝ！ガーデンの中じゃ未成年者は絶対禁止だし、あんまり飲める機会もないし。これは役得つてヤツです。

「ねえ、リンチさんの娘さん……」

と話を切り出そうとしたら、マスターの表情が変わつた。私の目の前まで運ばれていたビアグラスが引つ込められると「帰れっ！」と叩き出された。

ありやうや??

酒場の前で首を捻つて放心していたら、後ろからポンツと肩を叩かれた。振り返るとノアールが馬車を停めて心配そうな顔を浮かべて立っていた。

「何やつてるんですか、生翠さん。ここは女性が一人でフラフラする場所じゃありませんよ」

「あ……」

アナタ達のことを聞き込もうとしてました………とはとても言えずに笑つて誤魔化する。

ノアールが乗って下さいと馬車の座席を空けた。

「いや………宿は近くなんで一人で帰れます」

と言つた瞬間、地の底から鳴り響くような長いお腹の音が言葉を

遮った。

最後までしつかりと聞いたノアールは私のお腹をじっと見つめて
プツと吹き出す。

顔から火が出そうなくらい熱くなった。

「夕食がまだでしたら家で如何ですか？」

「い、いえっ！お気遣いなさらず！」

これ以上恥をかきたくない。馬車に乗ったあかつきにはお腹の大
輪唱を聞かせる事になりそうな予感がして必死に断った。

だがノアールは独特の押しの強さでこう続ける。

「セレナがあなたにワガマ言ったせいで食事を探る時間もなくな
ってしまったのでしょうか？ぜひ僕にその詫びをさせて下さい。本来
なら歓迎しなければいけない立場なんです。準備の進行状況とか、
『ガーデン』の話とかも、色々聞きたいし」

「はあ……じゃあ、少しだけ」

馬車の中に入ると、お腹に目一杯力を入れて音が鳴らないように
頑張った。もちろんそんな事で腹の音が収まるなら最初の音だって
出していない。

結局、馬車の中は腹の音大輪唱コンサートになってしまったこと
は必然だった。

馬車の中ではお腹が空きすぎたのを自覚してしまったおかげで目
が回ってしまい、訊きたい事も言いたい事も何一つ口にできなかつ
た。

ただノアールの横顔を見つめて、やっぱりこの人はカッコいいん
だなあと再認識しただけだった。

夜白が近くにいると大抵の美は霞んでしまうから、分かりにくか
ったんだ。

馬車がゆっくりと停止して御者が扉を丁寧に開けた。

昼間に訪れた屋敷とは違う場所だったので目を丸くしてノアール
を振り返る。

「家は…やはり母が色々と勘繰るので食事はここで。その後で送って行きますね」

と彼は申し訳なさそうに言った。はじめに受けた冷たい印象とは違った気配りに面食らう。この人自身には問題もなさそうだ。あると言えば話題の母親なのかもしれないな。嫁姑問題は永遠の結婚の枷だと思う。（↑第3書庫の耳年増的発想）

勝手にそう解釈してノアールのエスコートでお店の門を潜った。どこことなく高級感の漂うレストランは、先程の繁華街の目と鼻の先程の近さなのに喧噪を感じさせない。

華美過ぎず、地味過ぎない調度品。店内に流れるピアノの生演奏。店員の行き届いたサービス。

きつとお料理の味も最高級のもが出て来るに違いない。

だが、今の私は全く嬉しくないっ！髪の毛こそ結い直してキチツとしているとはいえ、ダサめがね。繁華街で悪目立ちしないように『ガーデン』の制服を脱ぎ、普通の流れの旅人がするような装い。つまりは綺麗とはかけ離れた格好をチョイスしてきましたから。

（うーん……憧れてた一流店も、身だしなみやマナーや…自分の格が揃わなきゃ居心地の悪い場所なんだねえ）

（生翠はまた一つ利口になりました。ノアールさん、気付かせてくれてありがとう）

（私は私のサイズの人と恋をしなきゃね……）

（たとえば……夜白とか？）

と店内で浮いているとノアールがそれに気付いて自分の首元に留めていた白い絹のハンカチーフを抜いて私の首元に巻いた。あつという間に彼の手は薔薇の形に留めて、チョンと引っ張った。位置をずらしながら頷いて確認する。

「大丈夫ですよ。今日の服には薔薇が似合います」

（て、て、て天然王子様！）

次に私の目元に手が伸びて来て、眼鏡を外していいですか？？つて囁かれた。反射的に首を横に振って逃げ腰になる。

「だ、ただーダメっ！み見えないデスカラー！」

客観的になるためには一枚でもフィルターが欲しかった。顔を背けて一生懸命その手を防ぐとノールはまた吹き出すように笑って「分かりました」、と席の方に手を差し延べた。

完璧なエスコートに、こんなダサイ格好の私もうっかりお姫様気分。白いハンカチーフはまるでドレスのコサージュのようだ。婚約者の居る相手にこんなにもときめいてしまっただろうか？

こうなってしまうては本当に眼鏡に感謝した。

これがなかったら仕事を忘れて今にも愛人に立候補してしまいうう。

「ここのレストランは何でも美味しいんですよ。早く出て来るものが良いですよ？」

「はい…あ…いやっ！お気遣いは無用ですよ！！？」

「僕もお腹は空いてるので、早く出来るものをシェフにお任せしてしまっただけですか？」

余計に気遣いさせてしまったようで、彼はニコリと微笑んでスマートにオーダーをした。

軽いお子様用のお酒を頼むと、グラスを傾けて乾杯する。

お子様用でも初めて呑むお酒はすごく良い香りがして美味しかった。名産品のリンゴを使ったお酒。その甘めの林檎酒を食前酒に食事は始まった。

始めは本当に食べるのに集中していて……それは醜い姿で必死に食っていたに違いない。でも少しお腹も落ち着いてきて、デザーに辿り着く頃には会話も弾むようになっていた。

「実は、正直言っただけでセレナの要望は叶えられないと思っていたので僕達も驚いているんです」

「え？」

「普通は『ガーデン』からの『歌術士』が一般の結婚式に賛美歌を唄いには来ないでしょ？」

「そうですねえ」

「僕も来ないと…」

と苦笑した。

もしかして、この人ってすごく可哀相な人なんじゃないだろうか？ 明らかな政略結婚をセレナ嬢は拒否するために無理難題を押しつけていて、それでも彼女が好きだから一生懸命叶えようとしているノアル。

だからといってセレナが悪いわけではない。

ナイフとフォークを下ろして姿勢を正した。ちゃんと仕事がい。だから先ず本人に訊いておこう。

「あの…これは政略結婚なんですか？」

「はい。父が…セレナと結婚して跡を継ぐ事を望んでいました。遺言なんです」

「だからあんな無茶を…」

「申し訳ありません。彼女をこの街から逃がしてあげられる甲斐性があれば良かったのですが…」

親や家に決められた事を覆すのは難しい。

よく分かる。

なりたくなくても、親元を離れたくなくとも、『歌術士』として『ガーデン』に入らざるおえなかった私はよく知ってる。

「どうか彼女の願いを叶えてあげて下さい。相手こそ選べなくてもそれ以外の不自由はさせたくない。だからもし彼女の願いが叶えられるのに時間が掛かるなら期日の変更もしましょう」

ああ、この人のセレナへの愛は本物だ。それが伝わってきて泣きそうになった。

「生翠さん」

「精一杯、頑張ります」

「ありがとう。今日はお話し出来て良かった」

そう言って微笑んだ彼は何処か物哀しくて、甘いはずのデザートがしなかった。

世の中は理不尽だらけだ。

「生翠さん……て、『ガーデン』の人の名前は不思議ですね？」

「え？？」

「あまり聞かない響きだから」

「私も『ガーデン』に入る前までは皆さんと同じような名前でしたよ」

私、話題が変わってホツとしてる。眼鏡があって本当に良かった。私、今酷い顔してる自信があるから。

それでもなんとかその話しに集中しようとした。彼が一番辛いの
に失礼だ。

「『ガーデン』の人間は、天と地から洗礼を受けて名前を変えるんです。私の場合は天から一字『生』。地から一字『翠』。どちらの名前も持つ事で、どちらかに傾く事なく悪魔と契約出来るんです」
「天地？空と大地ですか？」

「違います。天国と地獄です。まあ天使も悪魔もみんな総称して『悪魔』って呼ぶのでどちらが悪いわけでもないですけど」

「では、本当の名前はなんと言うんです？」

「それは、秘密です。真名を明かす時はその方に絶対服従を誓う時か、生涯を共にする時か……いずれにせよ『ガーデン』から引退しなければならいんです。私、失業してしまいます」

と、ようやく作った笑顔で笑った。

ノアールも「それは、困りますね」、と目を細めて笑った。

あーあ、結局私に出来ることはこれしかないんだから……。

計画を実行することがししぶな理由は一つ。歌術はそのためのモノではないからだ。

歌術は太古から使われた魔術が世界を壊していく禁呪であることが証明されて、世界への害がない形へと発展した魔法だ。

名前に天と地を持って、体内に二つの魔法陣を織りなす。それを共鳴させて発動するそれが歌声のように聞こえるから『歌術』と呼ばれるようになった。

『歌術士』とはこの世における魔法使いと言っても過言ではない。但し体内の魔法陣練成には時間が掛かるため、練成を守る守護者と必要する。

それはシールドの張られていない街の外で唄う場合、だ。

ただ、『歌術士』の術は、門外不出。何かの間違いで名前に天地を持つていない人間が歌術を唄えば、術者はバランスを崩して天か…地か…近い方に引きずり込まれて悪魔にされてしまう。だから『ガーデン』は歌術を門外不出とし、人前で軽々しく使うのを禁じている。従って私が所構わず歌を唄うのも禁じられたのでした、と。だから選んだのはこの時間。早朝、人目に付かないように宿を抜けて街の中心にある教会へやってきた。結婚式の会場だ。

朝陽が昇りきっておらず、まだ薄暗い。

キンツとした寒さも、朝の爽快感に紛れて気にならなかった。

教会の庭に立ち、深呼吸をして手を揉むと発声練習がてらハミングをする。朝なので少し調子を外してもご愛嬌。

長い間雪の下に眠るお陰で痩せてしまったアサスの土に少しずつ目覚めて貰います。

『おはよう、大地の精霊』

『雪の冷たさを知る者よ』

『太陽の暖かさを知る者よ』

『その力を分けておくれ』

囀るように唄い掛けた。久々の歌術。『ガーデン』内は術の無効化の結界が張つてあるし、外は守護者がいないと本来は唄うの禁止だし。それでもやっぱ唄うのが大好きで…『歌術士』として頑張りたいわけじゃないけど唄えることで喜ぶ自分がいる。

歌声に呼応して大地の精霊達が目覚め始めた。

栄養を受け入れやすくなった大地に、昨晚のうちに宿主から譲つて貰った残飯を砕いて肥料替わりに蒔く。それを受け取った大地が返事するように元気になるのが見て取れた。

(あ……でも……弱ってる)

大地の精霊の数が圧倒的に少ない。年中雪の下に大地が埋もれるせいか、精霊の元気の無さも気になった。そのための歌術なのだから対策は出来るけど。

もつと昔、魔術が盛んだった頃は、魔力があればこんな肥料なんてドーピングしなくとも大丈夫だったらしいがこの歌術は残念ながら万能じゃない。

魔法としては精霊魔法に属するものが主。唄う事で万物に呼び掛けて力を貰う。

場合によってはこうやって畑仕事だつてするし、採掘の手伝いに行く者も居るし。

万能だった魔法使い達は万能を捨てても歌術を選んだ。

自然と共存して行く途を選んだんだ。

だから歌術をこんな風に使うのは気が引ける。

それでも『ガーデン』に所属する私には唄わない選択肢は出て来ない。私はこの街に、季節をねじ曲げて春を呼ばねばならないのだから…。

大地の準備をして、種を蒔いて、成長を促進させる唄を唄い掛ける。

朝の段階の準備はまずまず。

大きな魔法を使うからその準備は入念に行わなければならない。

歌術の後は必ず余韻で頭がボーっとする。鼻をくすぐる香ばしいパンのにおいが私を現実に引き戻した。

まだ準備する時間はある。焦って人に聴かれたらそのが大変なのだから。

土に触れて話し掛けるように呪文を紡ぐ。

土が呼応してドクドクと脈打つのを感じて安心した。

『歌術士』は万能ではないから、完全に息絶えたモノを蘇らせはしない。それが人間であっても、物であっても。

人気がないのを再度確認してから宿に小走りで戻り、朝食を出し

てる食堂内を見渡した。あまり広くない店内には見知った顔がない。本来なら夜白が居るはずなのに……。

取り敢えず食事を探ることにした。席に着くと焼きたてのパンとミルク、スープが並べられた。決して豪華な朝食ではないが、スープは大変美味しいし、焼きたての自家製パンにはクルミとドライフルーツが沢山、それでいてふわっふわだ。レシピを貰って行きたいぐらいだった。

彼は昨晚はずいぶん遅くまで不在だった。飲み過ぎで朝食を抜くなんて任務で来ている初日からそんな調子では困るのだが……任務に慣れている彼にはそんなに気負ってするレベルの仕事ではないのだろう。実際私だってここに来るまでナメていた。

ところがこんなにも準備を必要とする仕事を押しつけられてしまい、一人じゃ大変だし夜白にもそれなりに手伝って貰おうかと考えていた。

宿主に事情を話して、朝食のパンとミルクだけ分けて貰うと二階の客室の扉を叩いた。

返事は返って来ない。

「夜白？」

呼び掛けても室内は静かなままだった。耐え兼ねて、そおつと立て付けの悪い扉を開けた。

返事、返って来ないはずだ。夜白は居なかった。

ベッドも整ったままの室内は明らかに昨晚使われていない。昨日から帰ってきていないのだ。

ふと思いついたのは昨日、繁華街で見掛けたたくさんの娼婦達。

（ああ、あアイツ……ちよーサイテーっ！！）

正直言つて認めたくないけどアイツなら女なんか買わなくたって寄つて来るだろう。どこぞの女の所に行つてるに違いないのだ。

パンと瓶をベッドに投げ付けて早々に部屋を後にした。

なんだか凹む。

知り合いのそういうところは見たくない。お子ちゃまな思考だと言

う事は分かっている。

『ガーデン』の人間は傭兵だ。聖職者じゃない。だから女を買おうと、恋人を作ろうと勝手だ。

唇を尖らせながら宿を出て、『ガーデン』のアサス派出所に向かった。街の外れにある小さめの建物は図書館と繋がっている。普段は書庫の管理を任されるだけの司書官も、本来は『学士』だ。私の顔を見るとすぐに『学士』としての顔をする。

「手紙ですか？」

「はい。シール支部まで」

派出から支部は毎日定期便が行き来してるから任務中はその定期便に乗せて連絡をさせて貰う。さながら郵便局だ。……別に、夜白のことをチクるために来たんじゃないぞ！

ただ必要な私が物資は街の商人を通すよりも支部経由で送って貰ったほうが早いから。この地方では育ちきらないような種類の……春の花の種を取り寄せるのはこの方法が良いと思う。

夜白のことは……。まだ彼の出番ではないから気が緩んでいても仕方ない。今夜はたっぷり愚痴って、お説教して、終了だ。

そう、思っていた。まだ、この時は……。

次の日の昼を過ぎて、今度はクルーニーの奥様の方から晚餐の誘いがあった。今度こそ正式な招待で、断る理由もないので行くことにした。

情報収集も兼ねてだ。有益な話が聞けると良いが……。

自分で髪を上手く結えなくて、結局いつものように後ろに流して留めた。夜白が赴任してからずいぶん甘えてしまっていた自分に気付く。

昨日の陽が落ちてても、今日の陽が昇っても、彼は帰って来なかった。

どうしたって言うのか……。『ガーデン』に報告をすることもためらわれて、未だに何一つ出来ていなかった。

『ガーデン』の許可無く任務から離れれば懲罰動議に掛けられる。更に『ガーデン』から脱走したなら、手引きをした者共々処罰される。

『学士』なら目をくりぬかれ、『剣士』なら手首を切り落とされ、『歌術士』なら喉を潰されて外界に放り出される。

『ガーデン』は所属しているだけで高い身分と暮らし、そして身の危険に見合った給金が出される代わりにその戦い方は門外不出。脱走兵は『ガーデン』で身に付けた全てを棄てていかなければならない。

だが女性の結婚は別だ。高い能力の術士が子供を成せば高確率で術士の才能に恵まれる。子供を『ガーデン』に差し出す事で女性はこの牢獄から逃げ出す事ができるのだ。

その抜けるのさえ考えなければ『ガーデン』はとても暮らしやすい。だから抜けて出て行こうとする者はだいたい年若いママの思い出が抜け切らない者ばかり。

…なのに、ベテラン剣士の夜白が脱走する理由が分からなくて混乱してしまう。

溜め息を吐きながら外套を羽織って外に出た。

今は探しに行くにしたって私も任務から離れるわけにはいかないし、『ガーデン』に下手に通報すれば捜索隊が組まれてやってくる。そうしたら夜白の身が危険にさらされる。別に今すぐ彼が必要ということはないのだからギリギリまで待っていたいというのは私の甘さなのだろう。

外はまたチラチラと雪が舞い、呼び寄せた春の雰囲気をまた蹴散らし始めていた。

それでも宿のすぐ側にまで娼婦が立ち、夜の街だけは賑わいを見せる。

いくら世間知らずの私とはいえ、この状態が普通じゃないのは気付いていた。まるで前線基地の街のような娼婦の数。明らかに街の住民ではないような出で立ちの男達は今ぐりの傭兵だろう。それに

代わって追い遣られるように街の外れに構えた国立の図書館や『ガーデン』の派出所。

この街には『ガーデン』の権威はもちろん、シール王国の統治すら届いていないのではないか？何故そんな場所に異例の仕事を持ち込まれたのだろうか？

いくら前領主の遺言とはいえ、領主の結婚式に『ガーデン』の歌い手を呼ぶ金があれば、娼婦になるしか術がないような女共を減らすように減税したり、公共事業での給金を増やして働き場所を作ってやれば良いのに。

領主の結婚式といえきつと街中を揚げたお祭り騒ぎだ。それによって上がる経済効果だって少しはある。ただそれは一時の夢のようなもの。長い目で見たらそのお金は民衆の為に使った方が良い。

……と、貴族出身歌術剣士からのアドバイスでしたと……。

こんなことまで考えられる地方領主がいけないことも分かっているのだ。世襲制ではその人間に人の上に立つ才能があるとは限らない。せめて補佐に立つ人間にその才覚があれば良いのだが……。地方領主の場合は嫁とか、身内だろうけどあのセレナ嬢であのクルーニ夫人だ。期待はしない方が良い。

ノアールもきつと人は善い。でも人の上に立つ人間が自分の奥方に振り回されているようじゃこの街も先が知れてるってものだ。

次の代まで保つと良いデスネ。

と冷たい視線を繁華街に向かって投げ掛けた。反対側から馬車の蹄の音が聞こえて避けるように路の端に寄ると私の前で停まって扉が開かれる。

「生翠さん」

「あれ？ノアールさん？」

「お迎えに上がりました。夜は物騒だから」

「え？」

それなら馬車だけ寄越せばいいのにご主人様自ら出迎えに来るとは……。

彼らを心の中で厳しく批評していたばかりで後ろめたい気分になった。

人間的には本当に善い人なんです。心の中の成績表にメモっときます。

お礼を言つて馬車の隣に乗り込むと、彼の長くて綺麗な指が肩や頭にうつすらと積もっていた雪を払ってくれた。

「夜白さんが来られないって聞いて、女性一人で出歩かせるくらいなら迎えに行こうって思ったんです。迷惑でしたか？」

「そんなっ！滅相ありません」

「それは良かった。僕があなたに何かしようとするといつも困ったような顔をするから……迷惑なのかと思っちゃいました」

言われてパツと眉間のシワに触れた。クツキリと浮かんでいたそれを消すように指で撫でるとノアールは吹き出すように笑った。

スミマセン、隠し事には向かない体質のようです。

私は正直言つてモテてる自信はあるけど、アイドル扱いされてるだけで……口説かれたりとか男の人に免疫もない。こんな風に優しくされることは嬉しくても、もうすぐ結婚する方だと思うと自然と身構えてしまう。この人を恋愛対象に見てるならおこがましいのも重々承知してる。

すごく素敵な方だと思うから、セレナがああまで頑なのは不思議でならなかった。他に何か問題があるとすれば……変な性癖があるとか？同性愛？縛らないと萌えないとか？

如何せん、一年中暇な耳年増としてこの年まで『ガーデン』の書庫に棲み付いていたわけだ。変な性癖の心当たりは十分存在した。道具使ったり？他の人がいないと萌えないとか？

悶々と考え込んでいると優しい声が耳元で到着を知らせた。ビクツとして耳を塞ぐとノアールは哀しそうな目をこちらに向ける。

妄想して勝手にビクついて、どんだけ失礼なんだよ私。

先に馬車から降りたノアールの服の裾をそつと掴んだ。

「う……うめんなさ」

「いえ、驚かせてしまつてこちらこそ申し訳ない」

「違ふんです！私……夜白に言われてて……」

この期に及んで他人のせいによつてゐる自分が狡くて嫌い。でも何故かこの人に嫌われたくなくて必死だった。

「私、女だからあなたと距離を置けて……」

「え？」

「結婚を控えた方と噂になつたら大変だから」

「ああ……そうですね。俺が軽率でした。夜白さんの言うとおりだと思います」

そう言つたノアールは、馬車の中で固まっていた自分の身体を軽々と抱き上げて地面に着地させた。御者に合図を出して馬車を引き上げさせる。

身体をこんなに簡単に触れることか、全く分かつていないじゃないか。

しゃがみ込んで顔を隠したまま脱力した。今は絶対顔が真っ赤な自信があるから。

「生翠さん、母が待っています。ここは寒いでしょう？中に入りますよう」

上から降ってくる声に視線だけ上げた。手が差し伸べられて、私にはそれを拒む手段がなかった。

私、もうすぐ別の人と結婚してしまうこの人が……好きになつてしまいました。

通された広間のような場所に三人だけの晚餐の用意がされ、いや四人目の……セレナの分も有つたのだが彼女はやって来なかった。ノアールは私なんて迎えに来ずにセレナの元へ行くべきだったんじゃないか？

晚餐が始まり、広い室内のお陰で互いの距離は遠くて良かった。この三日間の中で一番豪華なご飯だということはわかったけど、さっきの今。動揺で味がよく分かりません。

だって恋してることに気付いた途端に失恋なんて……。初恋なの……。に……。

泣きそうな顔で必死にテーブルマナーを追いながら食事をした。クルーニー夫人は相変わらず美しい銀髪を保有したゴージャスな出で立ちで、まるで何処かの大貴族か、王族かのような立ち居振る舞い……。

（あ…………あれ？そう言えばシール王家って…………）

「奥様はシール王家出身の方ですか？」

「突然何です？」

「あ…………いえ、銀髪は王家の証だと聞いたことがあって」

「ガーデンの教育は素晴らしいわね。そう、私は先代のシール王の姪に当たります」

「すごく美しい髪の毛だから近い方なんだと」

そう言ってニコツと微笑んだ。奥様はその言葉に満足そうに頷き、ノアールは眉間にしわを寄せた。ノアールのそういう表情は初めて見るから少し驚いた。ニコニコ笑ってるだけじゃないんだなって。

「生翠さん、式の準備は順調ですか？」

「はい。当日には間に合わせます。後はセレナさんだ、と…………」

夫人はセレナの名前が出ると少し眉を顰めた。これから来る嫁のことをあまりよく思っていないことが分かる態度だった。

これは好きでもない人と結婚させられる上に他にも不幸フラグが立ってる気がするな…………。せめて気持ちの上で繋がっているならばその山も乗り越えられるのに。

母親のそんな態度に困り顔のノアールを見遣って、何か方法は無いかと…………。

方法は無いわけではなかった。自慢じゃないけど私は守護者がいないだけで『歌術士』としての腕は悪くない。使えない術の方が圧倒的に少ない。たとえば禁呪の中には催眠術のようなものだって、あるのだ。

何を隠そう私は禁呪を集めた書庫、第三書庫の主。（何もするこ

とがなかったから無断で入って本を読みあさっていただけだが、現役『歌術士』の中でもこんなに禁呪を知る『歌術士』は少ないだろう。いけないこととは分かっていたが、守護者のいない身分だ。少しでも役に立つことが有ればと勤勉になっていった事情も分かって貰いたい。

決して興味本位で調べたんじゃないんだぞ！

だが催眠や暗示の術は定期的に掛け直さなければ、永久的に効くものではない。どこかで綻びが生じて、精神崩壊に繋がるかもしれない扱いの難しいモノが多い。一時は良くて一生に繋がる選択を取らせる為に、その方法は取れなかった。

結局のところ私に出来ることは、準備を整えてセレナの気持ちを結婚に向き合わせることだろう。『歌術士』が魔法使いだってセレナは言ったが、こんな不便な力を魔法に括ったら魔法使いが怒るわ。明日……セレナさんの心が落ち着くように歌を唄いに行きます。準備の合間になってしまいますけどノアールさんも一緒にいかがですか？お二人で聴けば結婚への気持ちも近づきますよ」

「……………ありがとう」

ノアールはその言葉に暗い笑顔を灯した。

喉の通った気のしない晚餐が終了し、広間から出た。

夫人は私の退出よりも早く気分が優れないとかで自室へ引き籠もってしまった。正直自分の気持ちを自覚してしまった私には二人きりの状況が辛くて、早々に宿へ戻ることを伝えて席を立ったのだがノアールは私を独りで帰すことをするわけがない。徹底した紳士っぷりもここまで来るとタラシのようにすらみえる。

……………が、今の自分の格好を自覚したらただの善意だと理解出来た。私は今、決して可愛くはない。

ふと帰り際に大階段の一番目立った場所に飾ってある肖像画に目がいった。

ノアールに面影の似た赤茶色の髪の毛の男性。多分急死したとい

う領主・クルーニー男爵だろう。だがその絵が不自然に右側に飾られていることに気がついた。

見上げて首を捻ってるってとノアールが後ろからやってきた。

「左は家族が全員入った絵があっただんです」

ああ、納得。

左側は少し壁紙が陽に灼けていてそれがあった事を示していた。けれど亡くなった旦那様の肖像画はそのままに、家族のものだけを外すって少し変わってる気がする。

「母は後妻なんです」

「え!？」

「実は兄が居るんですよ。父が亡くなった時に母と話した直後に家を出てしまったんですが…」

「えー…っ」と

「母は父と恋に落ちて、前の夫人が亡くなる前から、全てを棄ててこの屋敷に転がり込んだそうです。妾、だったんです。身分も自分の家よりずっと低い男爵家のです」

そうは言っても爵位を持ってるくらいだし、この屋敷を見たって結構な貴族だと思うのだがやはり王族ともなるとその貴族にすらランクを付けてしまうのだろうか……。

なんだか『ガーデン』って場所がとても平等な場所に見えてくる。あそこはひたすらに実力主義だから。

「つまり、兄のウィリアムは前妻の子供なんです。長兄なので跡を継ぐ権利は兄にあるのですが、そこを都合良く出てきた遺言書を勝手に解釈して……」

つまりその話が『セレナと結婚をして跡を継げ』に繋がると？

なんだか頭が痛くなってきた。行方不明の兄貴のことは置いておいて。ノアールはもしかしてセレナのことを好きなわけではなく、母親に逆らえずに結婚させられてしまいそうで、そんな身勝手なクルーニー家で償いばかりに出来ることをするために結婚の準備に協力的なのではないか？

軽ーく失恋。軽ーく失望。なんだかなあ……………。

「ノアールさん、結婚したいならちゃんとセレナさんと話し合った方が良いでしょう」

「わかってます。でも僕達の間はもう平行線なんです」

ノアールの言い方にそれ以上の意味はなかった。結婚なんて契約なんだって伝えているような言い様に多少の戸惑いは感じて、彼らはそういう文化を築いてきた『貴族』という人種なのだから。

それからはノアールと二人で喋るのはなるべく避けた。

これ以上彼に何かを期待してはいけない。これ以上彼に失望したくはない。

そんな自分勝手な思惑とやることの多さが相乗して、高まった恋心も少し薄らいでいた。

忙しいなりに成果は出して、式はもうそこまでやってきている。

宿を出る時間はまだ暗い、夜に近い朝。

もうこの時間の行動も5日目。今日は時計が鳴る前に目覚めて、早起きには慣れてしまったとしか言えない。

明日にはセレナと…ノアールの挙式が行われて、晴れてこの街での初任務も終了する。

それが単に晴れ晴れとはいかない理由は二つある。

一つは恋というにはあまりにお粗末なものだが失恋が確定する事。
一つは夜白が一向に行方不明である事。

当然前者の問題は私が泣き寝入りすれば済むことで、大きな問題は後者だ。『ガーデン』には二人揃って戻らなきゃ謀反だと思われるてしまう。しかも、行方不明になった時に連絡入れなかったお陰でメツチャ片棒を担いでるし、私も懲罰動議はかけられる。

(でも……………アイツ、逃げない)

気がする。

根拠は何一つないけど。いなくなってもあんまり焦ってなかったけど。さすがにタイムリミットが迫ってくると不安だな。

と、切羽詰まっても意外と安穩とした思考だった。

だが目の前に起こっていることには息を呑んだ。

教会の前に植えた苗たちがグシャグシャに掘り返されている。

（灰？……焦げ臭い）

掘り起こした苗に火を放ったような痕。わざと人の仕業だと分かるような痕跡に成す術が見つからず、その場にへなへなとしゃがみ込んだ。

式は、もう明日なのだ。歌術は万能ではないのだ。

酒場でセレナ嬢の名前を出した時、街の人々が異常な拒否反応を示したのを思い出した。

この結婚によって誰が損をする？

この結婚によって誰が得をする？

分からない事だらけ。

でも謎は結婚を成功させる事で解き明かされる。

じわりと涙ぐんでいたのを必死に拭って立ち上がった。

仕事を何年も待ち望んでいた歌術士をナメンナヨ！

こっちは千載一遇のチャンスなんだから簡単に諦めてたまるかつ！
昇りかけた朝陽を見上げて口をキツと結んだ。

午後に宿にセレナからの使いが来て……現状の報告を、とタイミング悪く呼び出された。

ギャンギャン怒鳴られるかと思っていたのにセレナは随分と余裕だった。

咲かせようとしていた花々が焼かれてしまったこと、それどころか教会の建物にもすが付いてしまったこと。

一通り報告を黙って聞くとセレナ嬢は身体を重そうにしながら立ち上がった。

家に籠っているという彼女は顔色があまり良くなかった。それな
のにはじめに会った時よりも少し丸くなった印象を持つ。

私が居るからって外出をしないで食っちゃ寝してるお陰だろう。

まあ痩せ型だった彼女には今の方がちょうど良いくらいだ。

だが儚げな印象は重量と共に迫力にシフトしていてプレッシャーを感じる。比較的身長の高い彼女は、小柄な私を見下ろすだけでも十分威圧感を感じた。

だがそれ以上はなかった。

笑顔でただ『ご苦勞様。では式は延期ね？次は花壇が燃えないと良いですね』って笑うだけ。

ああ、この人が犯人だ。

証拠がなく、ただセレナを上から下まで見つめることしか出来なかった。

彼女の思惑通りに事が潰れるなら、セレナはどんな手段も問わないんだ。

春の庭を作ろうとする限りは花も土も……街のシンボルである教会すら燃やされて邪魔をする。

歌術士が万能ではないことを、この人は熟知しているようだ。

なんでこんな時に夜白はいない？

先程までの心情が180度転換して怒りの対象物となった夜白を思い浮かべた。

こんな面倒な任務押し付けて逃亡なんて有り得ない！

打開策になるもの、本当は一つだけ持ってる。夜白がいたら躊躇いもなくその方法を選んだだろう。

でも今の私にそれだけの力が無いこともちゃんと分かってる。

でも……

ノアールの顔を思い浮かべた。彼の哀しむ顔は見たくない。私が相手にならないのは分かっている。だからこそせめて他の人の手でも幸せになって貰うのを願うのはいけないこと？

心を決めて彼女に宣言した。

「セレナさん、式の日取りは明日です。大丈夫です。ちゃんと望みの形の式が叶います」

「なっ!？」

「当日に望んだ形でなかったら中止していただいても構いません。明日、春の庭で、式を挙げましょう?」

「……どうやって? あんな状況なのにな?」

「それは企業秘密です」

出来る? 出来ない?

正直言つて私には分からない。

でもここで先延ばしたって根本的な解決にはならないのだ。

セレナにはそれを分かつて欲しかった。式を妨害するなんて方法じゃなく、気がないなら周りやノアールを説得して誠意ある対応で断るのが筋だ。

そして、私達は決して結婚式を先延ばしにするために来たわけではない。

だからこそこの任務を終えるために尽力をつくそう。

ただひたすらに打ち込んでいれば光は見えてくるはずだから。

まだ陽が落ちる前、夕焼けが煌々と街を照らしている。

夜になる前のこの街は何故か閑散としていて、生活感が薄い。

人気の在る無しはもう関係がなかった。時間との勝負に手段は選んでいられない。

それにこの歌は契約の済ませた歌術士ですらおいそれと歌えない。いや、歌つても発動しない…が正解だ。だから一般人に聴かれた所で害にはならない。

正直言つて体力、気力、魔力共に遣うその歌は守護者のいない私にはキツイ。もし術が暴走しても止められない。せめて夜白がいれば暴走しても魔法剣を使って止めて貰えるのだが。

教会の庭の土に手を当てて小さな声で土の精霊に問い掛けた。

「大丈夫?」

トクン、トクンと少ないながらも鼓動のようなものが返事の代わりに返ってくる。

燃やされていった草木の断末魔や、焼きたくないのに焼いてしま

った火の精霊達の哀しみ。どうしようもなく無力さを嘆きながらそれを受け止めた土の怒り。

澱んでしまったそれらの念は全て人間に対するものだ。

想いは受け止めきれずに溢れた分が涙となって零れ落ちた。

（だから人間は身勝手で、だから人間は愛想尽かされちゃうのよ）
せめて私の声が糧になればいい。今から遣う術はそういう術だ。
振り絞るように声を張った。

『生きとし、生けるもの達よ』

『水の潤いを染み入って』

『火の暖かさに包まれて』

『土の恵みに感謝しよう』

『風の運ぶ季節を迎えよう』

歌は風に乗る、町中に響く。

返事のように舞い降りて来た春の香りが成功の証。

精霊たちの歡喜の音がハーモニーを作り出す。

穏やかな主旋律を追うように風が鳴いた。水が跳ねた。火が燃え、土が脈打つ。

更に高らかに声を上げると、少なかった精霊達が何処からか湧き出るように集まってきた。

『大丈夫だよ、リディア』

精霊が私の真名を呼んだ。

中空に笑って返事に代える。

ふと不穏な空気を感じて歌うのを止めた。いつの間にか、ガタイの良い男達が教会の周りを囲っていた。妙な雰囲気、夕方の忙しい時間帯に街から人の気配がしないのは……これのせいかな。

「やれ！」

とリーダー格の男が言った。逃げようと後ろに振り返ると囲まれていることに気付く。

慌てながらも震えるその手で鞘から剣を抜いた。

うちのコ——魔剣『火神の刃』。残念ながらただの飾刀に近いよ

うな魔法剣とは異なり、『ガーデン』の中でも超伝説級の武器だ。

魔法剣としての威力は伝承により御墨付き。更には物理的な切れ味を前の持ち主が研いたお陰で血肉の味をしめてしまい、時々生物を斬らないと炎を出してくれなくなるというちょっと困った性格の剣。

私と一緒に『ガーデン』の中で干されてたから、生物の血の味に飢えた今は一番危ない。

「逃げた方がイイデスヨ」

と、小さな声で一応ご忠告。

当然、聴く耳持たずに山賊みたいな大男が円月刀を振り翳して斬り掛かって来た。もちろん力なら私は全く刃が立たないような相手だが、この魔剣の敵じゃない。

一回刃を重ねるとグニヤリと熱で相手の刃が少し溶けた。これが獲物じゃないとばかりに束から怒声に近い振動が伝わる。

（んな事言われても……いや、ワカッテマスヨ）

食わしてやらないと主人の身体乗っ取って殺人剣になるから『ガーデン』内では調理前の兎とか鶏を捌いてました。

今まさに殺人剣への途……あ、私的には殺人鬼への途にまっしぐら。

でもね、殺らなきゃ殺られますもの。うん、仕方ない。

うんうんと頷いて剣を握り直しながら微笑んだ。

ようやく自分の中で人を斬る折り合いがついたので、本気でいかせていただきます。

剣はコネ入手だけど、実力は『ガーデン』の折紙付きデスヨ！

ちゃちゃっと剣を振り捌き、あっという間に片付けにかかる。

致命傷になるような傷にはなっていないはずだが、血を啜る程度には傷付けないとうるさい。

右手から少し不満が伝わってくるがなんとか諫めて鞘に戻した。

気絶している何人もの男達の中、どうしたものかと首を捻っていると斜め後ろから殺気を感じて振り返った。

私の反応が少し遅くて岩のようなもので顔を殴られてしまう。ガラスの碎ける音。

（あ………眼鏡）

眼鏡のお陰で目自体は守られた。だが視界が自分の血で遮られる。その血で自分の身体に傷が付いたことを知った。

それも………

「か…顔に……」

頭にかあつと血が上るのを感じた。

考えるよりも先に身体が反応する。

気配のした方に身体を捻って肘を入れながら体当たりした。視界は完全に血で塞がれているから鋭敏になった感覚だけがたよりだ。相手は負傷していたのか、身体が倒れた気配がしたが鼻息が修まらないので手応えのある場所に足をふり降ろす。

何か潰れたような感触と金切声に近い悲鳴に満足を覚えて息を整えた。

眼に入ってしまった血液を一生懸命拭いながらおでこの傷に触れる。自慢の顔への傷に再度怒りに震えながらも一度足を振り降ろす。

「生翠さん？」

視界はまだ回復していないがその声を私が聞き間違っはすなかった。

ノアールだ。

よりもよって男達と大立ち回りを終わらせた直後とは…。

「あ……」

「大丈夫っ！？血が……」

「あ…表面、だけですから」

掠れた自分の声に驚いてうわずったようなしゃべり方をしてしまった。

額の傷は浅くとも大量の血液が流れてしまう。拭ってもすぐには止まらなくてももう顔中血だらけだ。出血多量で頭が上手く働かない。

「生翠、さんですよね？」

「はい」

「いつもの眼鏡掛けてないから少し自信がなくて……」

とノアールの安堵が伝わって来た。

視界は晴れないが頬に触れる手の温もりに必死にしがみついた。

私、襲われたんだ。

私、誰も助けに来なかった。

私、この街の全ての人から見捨てられたんだ。

私、殺され掛けたんだ……。

例え腕っ節が強くとも、例え半殺しにしたのは私でも、そこまで疎まれているシヨックは大きい。

小刻みに震えた身体を大きめの手が包み込んだ。

「顔が血染めですね。宿屋の方が近いですか？手当てに行きましょう」

額にひんやりとした絹の肌触り。ハンカチーフらしきもので血を抑えてるようだ。

闇の中の温かな光。

黒い光……ノアール（黒）……。

「でも傷は深くないね？これなら痕には残らない」

穏やかな光……抑えた優しい声がすぐ上から降りそそぐ。

私はそのままノアールの腕に身を預けた。

ランプの灯と暖炉の火が二つの人影を照らしている。

よく見えないのはなんでだろうか？

少し淡い暖色系の色が視界を包んでいて、相手は誰だか確認出来ない。

身体も思うように動かさなくて、もどかしい思いをしながら痺れる指先に力を伝えた。

すぐに私の手を握るその感触が返ってきて、安堵を覚えて握り返す。

その手は私の手の力に驚いてか、一度拒絶したがためらいがちに手に触れた。

不器用に、優しく包む温もりに安堵して私は微笑んだ。

「夜：白、いつ、戻って来たの？良かったぁ」

「っ！？」

優しくかった手がビクッと強張って手を払い除けられた。

周りがざわついて、直後に視界が開ける。目を覆っていたタオルが退かされ、そこにはノアールだけが居た。

「夜白は？」

「はじめから、この部屋には僕だけです…」

「そんなはず…」

先程まで感じていた温もりも、安堵も全て消え失せてしまった。そう。私は夜白が姿を消した時に一つだけ考えないようにしていた事態がある。

夜白は本当に生きてるの？

ちよつとでも考えてしまった瞬間から誰の手も信じられなくなってしまう。ちよつと前まで確実に恋の相手だった人物すら。

箱庭で、疑う必要に駆られた事のない私には何が善で何が悪か、判断が付かないんだ。

不自由のない生温い檻の中で、自己主張しかしてこなかった私は……人を判断出来るほど目が肥えていないんだ。

恐怖が目を曇らせてこれ以上前には進めなくなってしまった。

「生翠さん、式は延期します。母には、貴方が体調不良で倒れた事は伝えましたからゆつくり休んで下さい」

「え…？」

「貴方の顔色、尋常ではありません」

ゆつくりとした動きで壁に掛かった鏡に映る自分を見つめる。

血の気が引いて真っ青な顔。

それが自分のものだと思えるのに少し時間が掛かった。

恐怖に沈んだ顔。これではノアールがそう言うのも当たり前だ。

でもここで式を中止して帰ってしまったら…。

私の何年もの努力はどうなってしまうのか…。

身体は震え上がって縮こまっていた。

でも、それでも…。私の中で心が葛藤している。

逃げ帰れば研究対象として不自由な檻へ逆戻り。それは嫌だと思
ってるから。

「ゆっくり休んで下さい」

優しい声が降り注いだ。

甘い誘惑。それに頷いてしまえば終わりだ。

帰れる、あの優しい檻の中に。

でも鏡に映った私は安堵の意志に反して必死に彼の手を握って引
き留めていた。

「無理をさせられません。ゆっくり休んで、ね？」

小さな子に言って聞かせるように、やんわりと自分を拒絶する声。

（自信が無さそうな顔………してる）

鏡に映る自分を見ることすらぎこちなかった身体に、無理矢理神
経を通わせた。

自信に満ちた顔を作って笑う、ただそれだけのこと。

（拒否される理由を、作らないように…）

『ガーデン』の信用があつたとしても、私は新人歌術士。信用を
して貰えないのは当然だ。

次第に身体の震えは止まり、何事もなかったように笑うことに成
功した。

私はこの仕事でプロになる。夜白だって『剣士』以外の仕事をい
っぱいしていた。交渉や段取り………ハツタリを言っても依頼主
を安心させることだって仕事のうち。

「もう大丈夫です。少し驚いただけだし、実際に命を狙われたと言
っても返り討ちにしておいて青ざめてたらおかしいですし、ね？」
と元気いっぱいの笑顔で言い切る。それを言うだけで手の中にい
っぱい汗を掻いた。

ノアールはその様子をじつと観察した。緊張が奔る。溜め息混じりに「分りました」と言った。

聞き分けのない娘だと思ったんだろうな。

そう思われても引き下がるつもりは全くなかった。

誰にどう思われようと結婚式は明日、決行する。

さつさと任務を終わらせて私は夜白を探しに行かねばならないのだから。

温かい風が街を包み込んだ朝。

長い冬が明けて木漏れ日に熱を帯びている。

家の窓が開かれて、街中の人々が教会を見下ろしていた。

歌を…歌おう。私にできる事はこれだけだから。

街中に響くように風の精霊にお願いして声を運んで貰おう。

歌詞は必要ない。

本当に力のある歌術は音に魔力を乗せて放つだけ。

音に反応して精霊が集い、魔法は具現する。

暖かな気候に応えるように芽吹く樹々。

黄色や桃の色彩が町中を埋めつくす。

やがて穏やかな春の風につられて街の人々が外へ出始めた。私の声に合わせるように唄う者も居れば、目の前の有り得ない光景に惚ける者も居た。

ただそこには今までのアサスにはない街の人々の関心があつた。

領主が代わろうと、結婚しようとして、関わりと困るかの如く無関心を決め込んでいた人々とは一転して…。

小さな子供が歌を終えた私の足下に寄ってきた。

「おねえちゃん」

白い法衣のような『歌術士』の正装をちゃんと引つ張った女の子は、何か言いたい事をまとめきれずに必死に言葉を嚥んだ。

「えっとね、えっと…ありがと」

「え？」

「お花が、咲いたから」

「どういうこと？」

その子から聞き出そうと目線を合わせるためにしゃがみ込もうとしたら、親らしき女性が私の腕から子供を掠め取って行った。女性は会釈をして人込みの奥に紛れて行ってしまう。

それを追い掛けようとしたが、私の関心も人々の関心も現れた傭兵のような恰幅よい男達に向けられた。その男達の腕には無理矢理捕らえられてきたセレナがいたからだ。

「セレナさん！？」

人垣の奥から楚々と現われたクルーニー夫人がセレナに満面の笑顔で宣告した。

その笑顔は周りの者が息を呑むくらい美しいものだった。

「ようやくの春です。氷が溶けましたよ。結婚式を行いましょう」

「こんなのはまやかしですっ！！本当の、春ではないっ！！」

「それでも、期限はやってきました。ノアールと結婚していただきます」

夫人は美しく澁刺とした笑みから艶めかしい笑みへと表情を変えた。欲望に満ちた笑みを浮かべる夫人の言葉は更に続く。

「言いたいことは分かっています。ノアールからも貴女との結婚の意志がないことは聞きました」

「そうです！私達は……だからっ！」

「だから貴女は結婚をした後は好きに死になさい。私が殺しても良い、貴女自身で死んでも構わない。もちろん、屋敷の中で生きる屍になっても構わない」

セレナの人権も、街の人々の存在も、ここにいる私も、まるで無視した自分勝手な言葉。

その鮮烈の宣告に周囲の全ての音が消失したように静まりかえった。

私の心中はそんな切迫した状況に付いていけず、エラいところに来てしまった！！とドン引き。

もう本当に帰りたあゝいつ（泣）

「と、取り敢えず待つて下さい」

引きつりながらも私は間に入り、セレナを拘束している男達に対して剣を抜いた。

私の姿を目にした男達は、私の小柄な容姿からか、小動物でもつまむように腕を伸ばした。

小さいってバカにされるのはあんまり好きくないな。

男のその手を思いつきり剣の束で払いきる。男も流石に私の動きに怯んで下がった。

殺気を放って構えると、男共もそんなにバカでもないらしく、逸って襲って来ない。

それは大正解だ。彼らには残念なお知らせだが、今この街中で私に敵う者はいない。

何せ大掛かりな歌術の真つ最中。

街の結界内の精霊全部が私の味方ですから！

体力消耗も激しいので無駄なことはあまりしたくないのだがかつてくるなら相手になりましょうとも。

剣を抜いて暴れる必要すらないですよ！

パチンと指を鳴らすと風の精霊たちが鎌鼬となり男達の身体だけを斬りつけた。彼らの腕から解けるように解放されたセレナと目が合う。

「セレナさんっ！こっちにっ！！早くっ！！」

「あ……はい」

男が腕の痛みに苦しんでいるうちにセレナは走った。サツと私も彼女の盾になれる位置に移動して夫人を見やる。

後ろから不審そうなセレナの呟きが聞こえて来た。

「…誰？」

「生翠ですっ！！さんざん会ってたでしょーが！」

「生翠さん？だって瓶底眼鏡…」

「昨日、割りましてっ！」

「ああ…なるほど」

眼鏡を掛けなきゃいけなかったのも、眼鏡を割ったのも、アンタが原因だっつーのっ！

と、色々怒りたかったが今はそんな場合じゃないからグツと我慢した。変にマイペースな方ナンデスカラっ！！

気を取り直して夫人の方を向き直った。

「奥様、政略結婚といえども…結婚というものはこんな風に無理矢理行うことではない筈です」

「生翠さん、貴女は何も分かっていない」

「分かりません。こんな事、分かりたくありません」

「私は人生を掛けてこの街に来たのです。譲るつもりはありません

！退きなさい！！」

「退きませんっ！」

「何も知らないくせにっ！」

「知りませんよ！私が分かる事は貴女がセレナさんを無理に結婚させようとしたことだけです！分かって貰いたいならちゃんと伝えて下さい！！」

「あの家に…っ！私は身分も家も捨てさせられたんです！！あの家につー！！」

妾だった、とノアールは言っていた。それはあの家での本妻との争いが優に想像できた。ずっと愛の為に我慢してきた想いが、愛する者を失って迷走してしまったのかもしれない。

「貴女は、愛する人と居ることが幸せじゃなかったんですか？」

「幸せ？そんなのは全てあのヒトの幻想だわ」

「なら政略結婚がどれだけ不幸を生むか、一番分かっているでしょうっ？」

「だからといってウィルとセレナが結婚したらノアールはっ！！？」

ああ、歪んだ愛がここにある。

自分のただ一人の息子に、自分がようやく手に入れたものを渡したかっただけなんだ。それが『望まない結婚』という、過ちの連鎖

だと分かっている……気付かないふりをしている。

そう分かった瞬間、涙が零れ落ちた。

周りにいた精霊たちにも動揺が伝わる。

（いけない………だめ………）

まやかしの春を呑み込むように六花が咲いた。

色とりどりの花々の上に冷たい雪の花が舞う。

人工の暖かい気候のせいで地面に辿り着くとすぐ消えてしまう儚い花。

私の泣き声が荒れ狂った精霊達のハーモニーで唄になる。

夫人が、セレナが、街のみんなが降り注ぐ雪の花を見上げた。絶望の表情で空を仰ぐ。

「こんなっ！こんな辺境の地で妾として一生を終える為にここに来たんじゃないっ！私は王族です！！こんな寒いばかりで、植物もろくに育たない土地で何十年も苦勞して……更によやく手に入っこの地にはあの女が呪いまで掛けてっ！！」

ああ、この街に春は来ない。呪い………どれだけのものかは分からないが、この地には元々精霊が異常に少なかった。

人間は、時として思いを募らせて力にになってしまう事がある。

『あの女』と呼ばれた人が誰なのかは察しがついた。

前妻は自分が死ぬことで、夫人の元に全てが手に入ることが許せなかったのだ。そして呪いの言葉を紡ぎ、それは音となり、精霊に伝わった。

だからこの地に春は来ない。

植物達は来ない春を待ち望んで土の中で死んでいったのだろう。

長い冬は人々の心を領主から離れさせる良い切っ掛けになってしまった。どんなに領主が変わっても、もう戻らない人も多いだろう。だから春に結婚すると、春は来ないから結婚出来ないと、セレナは言っただ。

夫人が小娘のようにしゃがみ込んで泣いた。

私は彼女の今までの人生の全てを否定してしまったのかもしれない

い。それでも私は、生き死にはその人自身の権利だと思ってる。運命は選べなくても、明日どう生きるかは私の権利だと思ってる。

だから、私は一秒でも長く歌を唄おう。

まやかしの春を作り上げるさっきの歌ではなく、この土地に多くの精霊を呼び込むための歌を。吐き出された呪いの言葉を浄化する声を……。

精霊たちよ、痩せた大地を癒してあげて。

凍った心を溶かしてあげて。

腐った柵を解いてあげて。

この土地にある因習を解き放つように、彼らの努力が実るように、歌を唄った。

先ほどよりも多く、一緒に奏でる音。街の人々の声が重なっていく。

精霊が多く集まってくると、黒い染みのようなものが地面から湧き出るように立ち上り、夫人の身体を覆うように取り憑いた。

（呪いの原因っ！！）

今の夫人の負の心は格好の温床だったに違いない。

（げえっ、悪魔！？）

街の中だから悪魔なんて出ないと思つて油断していた。

盛り上がった気分も一瞬で冷める……背筋の凍る思い。

ここには私しか『悪魔召喚士』がいないのだからすぐに戦う覚悟を決めた。キツと目を釣り上げて魔法剣を構える。

「ハイハイ、ゴクロー」

と、人を小馬鹿にした声が降ってきた。

今度こそ、間違えない。

「夜白っ！」

「危ないから半人前は下がっててねー？」

夜白はその台詞が耳に届くと同時。あっという間に悪魔の影を撃った斬って棄てた。

夫人の身体がぐらつくのを片手で軽々と受け止める。その後ろ姿を見て、馬鹿にされたことを怒るよりも抱きつきたいと思ったのは……不覚としか言いようがない。

「な……………あ……………アンタ何処行つてたのよお」

「あれえ？心配したあ？」

「してないっ！」

「あ、そう？手え、なかなか放してくれなかった癖にい？」

「！？やっぱり昨日のっ！アンタだったんじゃないっ！！」

とムキになって叫ぶ私を、背の高い夜白は空いてる手で上からヨシヨシと撫でた。

後ろからノアールと、それによく似た赤い髪の方がやって来る。

それこそ奇跡が起きるのを自分は見てしまった。

この地の精霊たちが赤い髪の彼を包み込み歓喜の声を上げ始めた。自分の心に呼応して不安定だった精霊たちが支配を取り戻し、そしてこの地に戻っていく。主が帰ってきたと認めるように……。

セレナが自分の腕をいつの間にかすり抜けて彼の腕に飛び込んでいくのが見えた。

「ウイリ、アム様」

「セレナ、遅くなってゴメン」

「本当です……………遅すぎます」

「結婚しよう、セレナ」

呼び集められていた精霊達が二人に最大の祝福を与える。

この土地の精霊にも、彼らは好かれているのだ。

私は、精霊たちに力を貸して優しく歌を唄った。春はもうすぐやってくるだろう。

「はあ??」

はつきり言つてこの私の言葉には怒りが籠もっている。

前でニコニコと柔和な笑みを浮かべて座る二人。夜白とノアールだが……………何にも分かかっていなかった私への説明がこれだ。

『最初から依頼はこの土地から逃げていつてしまった精霊を呼び戻すことだ。』

『結婚式は偽装。元々ウィリアムとセレナは相思相愛。もうすぐ赤ちゃんが生まれます。』

『夜白のもう一つの仕事は、夫人の画策で追い出されたウィリアムを呼び戻すこと。』

本来の筋書きでは、夜白が消えた日からセレナが重箱の隅を突くように私の欠点をつついて結婚式を先延ばしし、ウィリアムが街に到着したら精霊を呼び戻す予定だったらしい。しかも精霊を呼び戻す為に私の力じゃ足りないと思って増援まで呼んでいて、もうすぐここにやってきます……………。

「勝手に派手にやってさ、俺が間に合わなかったら街もろとも心中だったね。間に合ったこと、感謝してね？」

「だ、誰がつ！？アンタいなくても私だって被えたわよ！私だって『剣士』だもん。しかも精霊を呼び戻すくらい信用しなさいよ！」

「アハハハハ、無理無理」

「ひどっ」

「生翠、半人前は半人前らしく甘えなさい」

「半人前って連呼すんなあっ！」

「半人前だろ？俺がいなくなつてすぐに『ガーデン』に問い合わせていけば分かった事態なのに」

「だって……………」

「だって？」

「帰つてくるって、信じてたもん」

恥ずかしい台詞だって言うのは分かつてる。言ったその場から顔が熱くなった。だがそれを聞いた夜白は馬鹿にするでもなく、大輪の薔薇が咲き誇るように美しく微笑んだ。

「そんなに俺のこと好き？」

「はあっ？？んなわけないじゃん！！」

「天の邪鬼もカワイイヨ」

「どんだけプラス思考!？」

言い争っている私達を勝手に解釈して和んだノアールが「仲良いですねえ」と言った。夜白がニコニコしながら頷く。私はもう何を言っても無駄だと理解して脱力した。

「結局はノアールさんが家督を継ぐんですか？」

「違います。政治は兄の方が向いてるし、僕が継ぐと母はどうしても関わってきてしまう。あの人はそんなものに無縁な場所で暮らした方が良いんだ。それに、僕はずっとやりたいことがあったのでこれからそれをしようと思ってます」

「そう、ですか」

「はい。なので宜しくお願いします」

「は？」

「生翠さんは先ほどからそればかりですね」

「いや……………ちよつと待って!こればかりは本当に」

「僕も『ガーデン』に行きます。ずっと…………『学士』になりたかったんです」

生き生きとした表情でノアールは言った。『ガーデン』の中でも『学士』だけは試験に通れば一般の人々がなれる。でもその試験は難関中の難関。『ガーデン』内で雑用(場合に寄っちゃガーデン内の給仕担当になることすらあり得る)ばかりしている『学士』の彼らは外の世界から見たらまさにエリートなのだ。「宜しく」と言われてもそう簡単には……………。

「ま、まさかこの依頼……………」

「そうです。僕の身売りが条件です」

ノアールが『ガーデン』に入ることを条件に『ガーデン』が引き受けた依頼ということ。

おかしいと思ってた。こんなにさびれた街の領主がどうして『ガーデン』に破格の依頼料を払えたのか。

それほどまでの才能、ということなのだろう。

本当に『学士』になりたかったのか、それともここを救う為なの

かは分らない。

でも彼自身には『ガーデン』に入る価値があったのだ。
精霊は帰ってきた。

お兄さんも帰ってきた。

お母さんも、ようやくこの土地の呪縛から逃れられるのだから。

「改めてなんですけど生翠さん」

「あー……ノアール、私達同僚になるのよ？生翠って呼んで」

強気な私の言葉にノアールは照れながら頬を染めて顔を綻ばせた。

「じゃあ生翠、お願いがあります」

「何？」

「兄と義姉の結婚式で歌ってくださいますか？」

「もちろん喜んで！」

分かっていただけこれでめでたしとはいきませんよね？

『ガーデン』に戻るとすでにまんまと黄以様による長時間に及ぶ
お説教が待ち受けていた。

内容はもちろん夜白の不在をガーデンに報告をしなかったと言う
こと。

くどくどと何時間にも及ぶ説教を受けた上に言い渡された処分は
始末書の提出と減俸。せつかくの報酬はほぼナシ。タダ働き同然。

一区切りついて、黄以が言った。

「無茶をして…怪我をしたらどうするんだい？無事に、帰ってこら
れて良かった」

「黄以様……」

「おかえり、生翠」

「ただいま、です」

少し照れくさい。でも温かな気持ち。

私、ちゃんとこの場所に家族を感じてるんだ。

望んで『歌術士』になったわけじゃない。でも私は歌が好きだわ。
真珠も英里も黄以様も……夜白も。

これからはノアールも一緒だ。

私はここで生きていく。この、優しい牢獄に繋がれて。

後日談として……………

私と夜白は名うての仲人として巷にその名を轟かせた。

自分達をご指名の依頼は殺到したが……………

食うには事欠かないぐらいの依頼量だったが……………

私は決して仲人を生業としてはいないっっ!!

春待ちの街／アサス（後書き）

続きます……………。

と胸を張って言えないのはもう何年も三章の中盤以降を書けていないからです（泣）

でも必ず三章ぐらいまではやります。

書くの、ノってるときに書かないと全然書けないんです、私。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5475r/>

聖歌伝

2011年3月12日00時10分発行